月に眠る人

作・演出　渡辺えり子

風間重吉（重子・軽子）・・根岸季衣
風間長子・・・・・・・・・田中利花
風間幸次・・・・・・・・・土屋良太
風間三郎（安井　猛）・・・立花弘行
風間行男（斉藤）・・・・・大森寿美男
砂原　勝（阿部亀治）・・・渡部又兵衛
砂原　勇（金杉）・・・・・松元ヒロ
砂原伸子・・・・・・・・遊上良子
土田高子（大田先生）・・・山崎ハコ
蕗谷医師（出前持ち）・・・大谷亮介
その妻（阿部静代）・・・・渡辺えり子
風間佐和子・・・・・・・杉嶋美智子
風間　渉・・・・・・・・源野みゆき
火野俊一（松下康好）・・・武発史郎
火野真弓・・・・・・・・大谷桃子
原本国子・・・・・・・・中川圭永子

桐山巡査・・・・・・・・川上　泳
阿部動太郎・・・・・・・宇梶剛士
阿部マツ・・・・・・・・石井澄子
風間作衛門（出版社の男）・・東銀之介
武田鉄夫・・・・・河野洋一郎（大阪公演）
・・・・小林一英（東京・山形公演）
七歳の重吉・・・・・・・前田和守
一七歳の重吉（重太郎）・・・樋口浩二
子供（家政婦・店員・久世光）田根楽子
久世　薫・・・・・・・・内野　智

満月軒のダンサー・・・・・・・前田和守
石井澄子
上野晴美
大谷桃子
村田　泉
山下仁美

満月軒の従業員・・・・・・・前田和守
小林一英
樋口浩二
溝上朗生

長子の同僚・・・・・・・上野晴美
大谷桃子
源野みゆき
宍戸久利子

村田　泉
山下仁美

長子の親戚・・・・・・・杉嶋美智子
遊川良子

小人達・・・・・・・松元ヒロ
渡部又兵衛
大森寿美男
立花弘行
武発史郎
前田和守
石井澄子
上野晴美
大谷桃子
源野みゆき

杉嶋美智子
村田　泉
山下仁美
小林一英
土屋良太
溝上朗生

暗闇の中、怒ったような口調のロシア語が聞こえてくる。
激しかった口調が、相手をなだめ、説得するような穏やかなそれに変わったところで舞台明るくなる。
高層マンションの一室。見晴らしの良い窓の片方はビルが隣接し、エアロビクス教室で踊る主婦達が見える。
部屋は引っ越しの最中で数人の運送屋の制服を着た男女が手際良く荷造りをしたり、家具を運んだりしている。
中央のテーブルでは中年の女（土田高子）がウォークマンのヘッドホンを耳にあて、原稿を書いている。女がスイッチを止めるとロシア語は止み、巻きもどすと巻きもどされ、スイッチを押すと又聞こえ始める。
女はその度に筆を走らせ、考えながら、翻訳をしているようである。
ロシア語が聞こえている間、運送屋の声は聞こえず、まるでパントマイムの集団演技のように見える。
懸命にペンを走らせていた女に、年輩の運送屋風間長子がさっきから声をかけているようだが女は気が付かない。思いあまって背中をたたく運送屋。
女ヘッドホンをはずす。

向かいのエアロビクスの指導員のキンキン声が急に聞こえてくる。

長子　・・・さん。

高子　・・・・・・

長子　お客さん、ここの電気どうします？

高子　え？

長子　何番におつけします？

高子　どうしようかなあ・・・

長子　新しいの買います？

高子　んんん・・・

と、一番年長に見える運送屋砂原勝が、手際良くイスにあがって照明器具を引き抜いて降ろし、梱包してしまう。

長子　ちょっと勝さん、今聞いてんだから。

勝　向こうは４畳半以外全室和室なんだよ。畳の上にこんなのつけちゃ、田舎の代議

士みたくなっちゃうよ。ねえ、お客さん。

高子　ううん・・・

長子　悪いわよ。そういう好みかも知れないんだから。

高子　ううん。

勝　時間がないからさあ。お客さん、白木の枠かなんかついた日本調のいいの、今、いっぱあるんだから、そういうの買った方がオシャレだよ。

と、さっさと運んで行ってしまう。

長子　スミマセンねえ、あの人せっかちで。

高子　御主人ですか？

長子　え？

高子　今の方。

長子　とんでもない。他人ですよ、あんな人。

と、作業にもどる。

高子がヘッドホンをつけると、又ロシア語が聞こえ、一同の声は止む。と、電話が鳴ったらしく、高子以外の一同動きを止め、電話を見る。一同高子に声をかけるが、聞こえない。
近くにいた青年行男が女の肩に手をかけ、電話を指さす。
女、ヘッドホンを取ると、電話のベルが聞こえる。

高子　はい土田です。ええ？・・・ああ、ええ、みなさんいらしてますけど。

と、辺りを見回して、

風間さん、風間重吉さん、いらっしゃいますか？

と、一同手際良く作業している中で、もたもたと本の整理なんかをやっていた男に一同の視線が集中する。

重吉　はい、すみません。

と面倒臭そうに受話器を受けとる。

長子　はい、・・・ああ・・・あ？

重吉　何で仕事先の電話番号なんか教えるのかね。教えてないよ。調べたんだろ？

長子　誰？

重吉　佐和子。

長子　・・・ったく・・・

重吉　ああ？・・・うん・・・うん・・・いや、はい・・・そうですね、前者にして下さい。え？いえ、後者はちょっと・・・このごろ胃の具合が・・・はい、じゃ。

長子　どうせ、今晩のおかずの相談かなんかだろ？

重吉　どうして判ったの？

長子　今日学校休みだろ？ヒマもてあましちゃって、またしこたま料理作る気だよ。料理の本から抜け出したような、見かけ倒しの奴。

重吉　うまいって言ってたじゃないの。

長子　盛りつけがうまいって言ったんだよ。

三郎　仕事中だろ？なんだよお客さんの前で。

長子と重吉、ジッと見ていた高子に気付いて作業にもどる。

高子　あ、どうぞ、どうぞ、これ嵌めると何も聞こえませんから。これ、今日中に仕上げなきゃいけなくて・・・

と、ヘッドホンをつけて、又仕事をはじめる。長子、それを確認すると何か重吉に話しかけ、二人で口論し始める。

間にはいる幸次と三郎と行男。

勝と伸子と勇も現れて、長子をなだめる。

高子、テーブルの上で何か探し始めて、ヘッドホンを取る。

重吉　・・・ってらんないよ、こんなこと！

長子　じゃあ、佐和子さんに食わしてもらったら！アパートかなんか、借りて出てけば

いいいだろ！こっちは引っ越し屋なんだから。いつだって手伝ってやるよ！たいした荷物もないんだから！

重吉　判ったよ！こんな運送屋、砂原さんについでもらえばいいんだよ！

勝　いやいや、こっちはただのアルバイトなんだから。そんな気は少しもないんだから。ね、気にさわったら私ら、帰ってもいいんだよ。

伸子　そんなこと、助かってるんですよ、お義父さん。お兄ちゃん、この頃、全然やる気なくて。

勝　私らのせいじゃないのかねえ。

勇　そうなんですか？お義兄さん、僕らへのあてつけなんですか？

高子　あの・・・ここにあった辞書、知りませんか？

と、一同ケンカをやめ、手元のダンボールを確認する。

幸次　あれ、お客さん、さっきお手洗いに・・・

高子　ああ・・・持ってったんだ・・・

と、隣室に去る。

幸次　大変だよな、引っ越しの日まで、メ切りに追われてるんじゃ。

三郎　普通そんな時引っ越しなんかしないよ。

幸次　止むに止まれぬ事情があるんじゃないの？

伸子　あたし、見積の時、悪いこと言っちゃった。

三郎　何？

伸子　衛星放送のアンテナはずすの、男の人なら簡単に出来ますから、御主人にはずして貰って下さいって。

幸次　悪くないだろ別に。

伸子　独身だったのよ。

三郎　ウソー。

伸子　男手があるなら、ラクチンパックなんて頼まないって怒られちゃった。

三郎　独身暮らしでこんなマンションなんてぜいたくだよなあ。

幸次　荷物も多いしね。どうみても四、五人家族の量だよな。

伸子　いるのよねえ、なんでも捨てられない人って。

三郎　４ＬＤＫで、使ってるのこのリビングルームだけみたいだものね。あとみんな物置きだもの。仕事なんか奥の書斎でやればいいのにさ。

伸子　本だの雑誌だので足の踏み場もないんだもの、無理よ。

三郎　でも、あのまんま引っ越し先に持ってくんだよ。ゾッとするよなあ。物が多すぎて、順番なんか覚えてらんないよ。

幸次　こんなの何に使うんだろ。捨てちゃおうか。

行男　よしなよ。集めてんのかも知れないぜ。

幸次　こんなの集めてどうすんの。

行男　人それぞれなんだから。

伸子　母さん、もうラクチンパックなんてやめよう。割合わないわよこんなお客ばっかりじゃ。

長子　大手がやってるからねえ。うちみたいのはガンバラないとさ。あ、それ三番、伸子。

伸子、青いガムテープにマジックで印をつけ、切り取ってはる。

伸子　兄さんそこ邪魔よ。もう仕事しないなら、帰ったら？

重吉、変なアクビをする。

勝　重吉君、君、やっぱり変だよ。長子さん、重吉君、何か病気なんじゃないかな。

長子　ただのなまけグセですよ。

勝　だって、私なんかがたった三ヶ月でこんなにできちゃうのも、重吉君に仕込んで貰ったお陰ですからねえ。この間まではテキパキ取り仕切ってすごい働き振りだったじゃないですか。

勇　かんぐりたくもなりますよ。僕らのせいだって。

重吉　それは違うよ、勇君。違うんだけどねえ・・・ああ・・・喋るのも面倒臭い・・・

と、横になってその辺りの雑誌を開いたりする。

勝　やっぱり病気だよ。

長子　この子は子供の頃から風邪ひとつ引いたことないんだよ。体だけは丈夫なんだか

ら。

勝　体じゃなくてさ、つまりその、なんというか・・・・

長子　家の家系にゃいませんよ、キチ・・・・

勝　いや、ホラ、神経の・・・・ウツ病とかねえ、神経の、ねえ？

一同、集まって重吉を囲む。

行男　頭かあ・・・・

高子、辞書を持ってもどってくる。

高子　・・・・どうしました？

重吉　ノイローゼかなあ・・・・何もしたくない。

高子　神経科なら、この上にありますよ。蕗谷って医者がやってるんですけど、カウンセラーの資格も持ってましてね。ちょっとイライラした時なんか私も行くんですけど。話を聞いてもらうだけでもスッキリしますよ。

行ってみたらどうです？

一同　・・・

高子、電話をかける。

高子　もしもし、あ、蕗谷先生？下の土田です。今、患者さんは？・・・え？そうですか。じゃあ、今から一人いいですか？はい、はい、風間さんて方、はい、じゃすぐに。

と、切る。

重吉　ちょうど今、患者さん帰ったとこで夕方まで空いてるそうですよ。良かったですよ、風間さん、いつも予約がぎっしりなんだから。いってらっしゃいよ。

伸子　ええ？

高子　海外じゃ当たり前なんだから、心配いりませんよ。

伸子　行ってくれれば兄さん、どうせぐだぐだしてるんだし。

勝　軽い気持ちでね。

勇　うん。カウンセリングなんだものね。入院するんじゃないんだもの。

と、一同面白がっている。

伸子　行ってきなさいって。

行男　いいなあ兄さんだけ、僕もついてってっていい？

幸次　バカ、　仕事。

勝　長子さん。

長子　じゃあ、行っといで。六時にトラック出るからね。

と、一同作業し始める。

高子も仕事を始め、重吉一人になる。

ロシア人の笑うような声が徐々に遠くなり、どこかの窓から聞こえてくるらしい低い声の女の歌が流れてくる。

重吉気が付くと階段の踊り場に立っていた。

と、踊り場の隅に子供が独り大きな地球儀を回して見入っている。

重吉　何しているの？

子供　どうすればいいかと思って・・・

重吉　世界の問題を君ひとりで解決しようと思っても無理だと思うよ。

子供　違うよ。月から見る地球がこのくらいだとしたら、どうやって僕がここにいるのを知らせたらいいんだろう。

重吉　誰が、月からここを見てるの？

子供　僕の家族さ。父さんと兄さんと妹と猫のクロ。

重吉　死んだ人達が月に行っちゃうなんていうのは大人の嘘だぜ。

子供　僕の家族は死んじゃいないさ。

重吉　だって、まだいまのところは、月には人は住めないんだから。

子供　知ってるよ。「意識」のことを言ってるんだ。頭を空にして月の方角に意識を届けると、月の砂漠の中空に意識のたまりができてね、お互いの気持ちが判るんだ。僕らはそこを意識の基地と呼んでいてね。皆んなでそこで地球の青い海をながめ

ながら、知ってる限りの歌を歌ったりしてみるのさ。

重吉　そんな意識のたまりを造れるのなら、わざわざ月の上でやらなくたっていいと思うけど。

子供　だって、月の位置は、地球のどこにいたって判るだろ？僕らは遠く散り散りになって、お互いの住んでる場所さえ判らないんだもの。

重吉　その意識の基地とやらで確認しあえばいいじゃないか。

子供　それができないのさ。具体的な会話はね、まだ無理なんだ。「ここにいるよ」ってこう、強く念じても、その感じが判るだけなんだ。

重吉　歌、歌ってるんだろ？

子供　歌は特別さ。歌の旋律はまるで体の海を波だたせる風のようだ。そんな風になでられて、足の底からふるえてくる。その感じで何の歌なのか判るんだもの。でもきっと、いつか、みんながもっとこのことに慣れたら、月の上で踊ることだってできるようになるさ。そして本当に話すことだって・・・

重吉　大丈夫なんだろうな、君。

子供　・・・こんなこと話すんじゃなかった。話したことなんかなかったんだ。大人には特にね。あんたの目が、うちのクロに似てたからついつい気を許しちゃったん

だ・・・。秘密だよ、おじさん。子供の秘密をバカにすると、あとでひどい目に遭うからな。

重吉　君はここの家の子供じゃないのかい？

子供　振りしてるだけさ。ここが月により近い場所だと思ったから、ここに住んでるだけなんだ。

重吉　そりゃ、ここはズイブンと空には近いようだけど。

子供　来いよ。予約してるんだろ？

と、階段を駆けあがる。

そこは蕗谷神経科、高子の部屋と同じ作りだが、シンプルな飾り付けで神経の休まる色彩を使った家具類が置いてある。

白衣を着た医者蕗谷がにこやかに現れる。

蕗谷　お待たせしました。どうぞ。

重吉　蕗谷先生ですか？

蕗谷　はい。蕗谷です。風間さん、ですよね？（と探るように見る）

重吉　なんですか？

蕗谷　いや、患者さんが一人で来たのは初めてだから・・・

重吉　そんなに重症な人ばかりなんですか？

蕗谷　色々だがね。みんな一応、深刻にならないように、軽く、フッと来たって感じを装いたいらしくてね。友達なんか連れてワイワイやってくる訳なんですよ。で、どこが悪いんですか？

重吉　それを看ていただこうと思って来たんじゃないですか。

蕗谷　いやいや、どこが悪いと思ってらっしゃるのかとね。

重吉　何もする気がしないんですよ、なあんにも。・・・これは・・・

蕗谷　何やってるんです？今。

重吉　引っ越し屋です。　父の会社で働いてんです。あ、五年前に父が死んで、今は母がきりもりしてんですけど。ああ、何か話すのも面倒臭い。

蕗谷　ま、ゆっくりでいいですから。どうぞ座って。お茶ね！

と、さっきの子供が出てくるが、感じが違っている。

重吉　あれ？

子供　紅茶でいいですか？

蕗谷　カモミールだよ。覚えが悪いね。僕はコーヒー。

子供、引っ込む。

重吉　あれは？

蕗谷　ああ、家政婦ですよ。

重吉　だってまだ子供じゃないですか。

蕗谷　自分で家政婦だって言ってるんだから、いいんですよ。

重吉　いいんですか？

蕗谷　月々五百円でいいからってきかなくて、こっちも手が足りないし、猫の手よりゃマシだから。

重吉　法律に触れますね。

蕗谷　風間さん、あなたマジメに話しておられます？

重吉　は？

蕗谷　あれ、うちの子ですよ。土・日の小遣いかせぎですよ。

重吉　はあ？

と、子供お茶を持って現れる。

蕗谷　土・日だけなんです。カウンセリングやってるの。看護婦休みなんですよ。ちょっとカルテ取ってきますから。

と、引っ込む。

重吉　（子供に）あの・・・・

子供　あそこ、あれ、見えます？

重吉　え？

子供　向かいのビルですよ。

重吉　あ、治療院ですか・・・・。マッサージしてるんですね。四、五人横になって。

子供　あの一番奥で、太った中年の男の上にのしかかってる女、見えます？

重吉　え？ああ、髪を茶色に染めてる人？

子供　そう、赤黒いマニキュアして、眉毛の上にホクロが二つ並んでるやせた女。

重吉　そこまで判らないなあ・・・ここからじゃあ・・・

子供　亭主がもう三年ばかり帰ってこないんです。あれ、あの女のところにね、もう三年。やっと去年突き止めてこうして、ここで見張ってるんですよ。

あ！こっち見た。

と、隠れる。

重吉　あいつ、まだ私がここで働いてるって知らないんですよ。

・・・・・・

蕗谷、出てくる。

蕗谷　何してんの？

子供　ちょっと床を、みがこうかと・・・

蕗谷　後にしてよそんなこと。さて、始めましょうか。

子供、引っ込む。

重吉　あの・・・どうなってるのかなあ・・・

蕗谷　ええ？

重吉　家政婦さんなんですかねえ、あの子供は・・・いや、あなたのお子さんなんですよね？

蕗谷　ああ・・・何か喋ってました？

重吉　・・・・・

蕗谷　多重人格ですよ。

重吉　え？

蕗谷　今、流行ってるでしょ？本なんか色々出てるから、あなたも知ってるでしょう。

重吉　一人の人間が色んな人格を持つようになるっていう病気のことですか？

蕗谷　それそれ。ここに治療に来たんだけどね、こっちもそんなの初めてだから、研究

がてら、いっそのことひきとろうということになってね。

重吉　一人に統合して行くんでしょう？何年もかけて。

蕗谷　そう。しかし女房が、治さんでもいいじゃないか便利だからなんて。

重吉　・・・・・・

蕗谷　冗談ですよ。ああいった病はね、本人が治りたいと思わない限りはほっとくしかないんですな。生きるための知恵に近いもんがありますよ。ああいった病気は。私もあなたも、ほどほどに多重人格だから生きてこられた訳なんだから。ま、それを意識できるかできないかに大きな違いがありますがね。しかし、多重人格にも、基本の人格てのがあることになってる訳なんですが、あの子にはそれがどうしても見つからない。引きとって三年、あの子が本当は誰なのか、今だにさっぱり判らないんですよ。ああいうのを見ると自分がほんとに神経科に来ちゃったんだなあという実感持つでしょう、ねえ？ハハハ。

重吉　・・・はあ・・・

蕗谷　じゃ、始めましょう。

重吉　・・・はい。

蕗谷　私は誰ですか？

重吉　は？

露谷　私が誰に見えます？

重吉　お医者さんです。神経科で、カウンセラーもやってる露谷先生でしょ？

露谷　私に会ったことがありますか？

重吉　いえ、今日、たった今、会ったばかりです。

露谷　じゃあ、どうして私が露谷だと思うんです？

重吉　・・・違うんですか？・・・まさか、患者だなんて、映画みたいなこと言うんじゃないでしょうね？

露谷　患者だったら私は患者だなんて言いませんよ。

重吉　参ったなあ、あなた誰なんです？

露谷　記憶力がだいぶ低下しているようですね。

と、カルテに書き込む。

重吉　ちょっと、ちょっと。

露谷　あなたが入って来た時、あなたは私が誰か尋ねましたね？

重吉　ええ。

蕗谷　その時私は、蕗谷ですと自己紹介したじゃありませんか。

重吉　そうですよ。だから私はあなたが蕗谷先生だと思ったんです。

蕗谷　なら、そう言えばいいじゃないか！あんた私が嘘付きだと思ったの？

重吉　思いませんよ。

蕗谷　私を信用してくれなくちゃ、カウンセリングも、診察もできないんだよ。

重吉　信用できるかどうか、これからですよ。

蕗谷　それじゃあダメだ。今、この時から私にすべてを任せる。身をあずける覚悟がなきゃあ、看てやれんねえ。根気がいるんだよ。大変なんだよ、人の頭ん中を探る仕事は。金じゃないんだよ。こんな面倒な仕事、金じゃ計れんよ。いくら金積まれたって嫌いな奴の頭なんかみるもんか！だから君を好きになりたい。そのためには君が私を信用して、受け入れてくれるかどうかが、まず第一なんだから。

重吉　・・・信用しますよ、あんた、医者なんだから。

蕗谷　医者だから？医者でない私は信用しないのかね？

重吉　あんた医者でしょう？

蕗谷　そう、私は医者だ。

重吉　じゃあ、医者でないあんたなんか関係ないでしょう？

蕗谷　じゃあ、私はどうして医者と判る。

重吉　白衣着てるじゃないですか。

蕗谷　じゃあ、こうやって脱いだらどうする？

重吉　脱いでも医者ですよ。私はあんたを医者だと知ってる訳ですから。

蕗谷　じゃあ、こうしたらどうだ？

と、ラーメン屋の出前持ちの格好をする。

重吉　それでも、私には医者です。

蕗谷　ほほう・・・こっちの白衣でも、私を医者として信用できるんだな。

重吉　できます。意地でも信用してみせます。

蕗谷　これでも？

と、机の下からラーメンを出して乗せる。

重吉　・・・・・・・

店員の格好をしたさきほどの子供が現れて、ギョウザを出す。

子供　お待ちどう様。

重吉　・・・はい。・・・・

蕗谷　これでも。

と、後ろの白いカーテンの付いた二つのついたてを店員と二人で左右に開く。
すると辺りはどこかの国の中華街にありそうな古びた中華料理店の店内に
変わっている。正面にはステージが据えられ、その上でけばけばしい衣装を
着たダンサーが踊り、歌手が歌まで歌っている。
ステージにはニセ物の月。

歌手　♪幸せ探して来たけれど
空に満月光るだけ

あなた私を好きかしら
「死んでもいい」とおっしゃって
青い月　白い月　赤い月
五色に変わる月の色
私の心もお月様
何見て変わる月の色
私あなたを好きだから
死んでもいいとおっしゃって

と、間奏中、蕗谷ステージにあがって踊り出す。

重吉　こんなにまでして、あなたは僕の何を試すんです？

蕗谷、マイクを取って司会者のように喋り出す。

蕗谷　あなたが本当に正気かどうか！

重吉　正気ですよ！

蕗谷　それはあなたには決められない。だからあなたはここに来たんだ。自分が病気かどうかを知るために。あなたは一体誰ですか！ああ！あなたはそれを知りたいんだ。誰でもみんな自分は正気だと思ってる。そして自分は自分だと思ってる。世界を見たまえ、とんだ気違いざただ。なのにあいつらみんな自分が正気だと思ってる。正気だ正気だと唱えながら、ああ・・・殺したり、ああ・・・奪ったり、ああ・・・札びらでケツふいたり・・・ああ嫌だ嫌だね、泣いちゃうよう・・・ハハハあなたが正気かどうかは、私が決めるんだ。あなたじゃない。

重吉　こんなことして、あなたはどうなんです？正気なんですか？

蕗谷　言ったでしょう？あなたを好きになりたいなって。そのためにはどんな手でも使う私なんです。

と、ちょうどさきほどの歌の二番が始まったので、歌手とデュエットし始める。

蕗谷　♪あなた私を好きかしら

死んでもいいとおっしゃって

二人　黄色い月　緑の月　丸い月

五色に変わる月の色

私の心もお月様

何見て変わる月の色

蕗谷　私あなたを好きだから

死んでもいいとおっしゃって

と、妙に激しく踊りだす。

重吉もったいないのでラーメンを食べ始めていた。

重吉　何でこんな医者に看てもらっちゃったかなあ・・・

子供　だめですよもうあの人を医者なんて言っちゃ。

重吉　え？

子供　あの人はもうこの中華料理店「満月軒」の店主なんですから。

重吉　でもあの人は、神経科医の蕗谷先生でしょ？

子供　多重人格ですよ。
重吉　ええ？
子供　でもあの人は無理して別の人格を呼んで来るんです。自分の中に。故意の多重人格です。悲しいですね。
重吉　コイ、コイの？
子供　恋じゃないですよ。故意、わざとです。でも、あの人は「多重」に恋しているのかなあ。
重吉　君だろ、多重人格者は？
子供　は？
重吉　今度は中華屋の店員か？
子供　私は昔から店員ですけど。そして昔から、あの先生の助手をしています。
重吉　そうか。多重人格者には別の人格の時の記憶がないというのが特徴だと本に書いてあったな。
子供　何言ってるんです？あなた。
重吉　君、名前は？
子供　竹下信です。

重吉　嘘っぽいなあ・・・

蕗谷　信ちゃん、カウンターに水持ってって。

子供　ほらね、ほんとでしょ？

と、歩き出すと隅にカウンターが見えてくる。とカウンターでラーメンをすすっているのは、幸次、三郎、行男である。

重吉　何だよお前ら、休憩か。

三人振り返りキョトンとしている。

三人　昼間弁当食ってただろう。ああ・・・大物運んでて、食い損ねたんだっけ？

・・・・・

重吉　勝さん達は？終わりそうか？六時まで。

三郎　兄ちゃん・・・（と幸次に・・・）

幸次　お前だろ？

三郎　行男か？

行男　・・・（首を振る）

幸次　いくら？

と、店員に尋ねサイフを出す。

店員　三千五百円です。

幸次　高いな。

三郎　だからよそうって言ったんだよ。

幸次　領収書ね、カザマ運輸で。

と、金を渡す。

店員　カザマ運輸ですね。

と、引っ込む。

三郎と行男、行きかける。
重吉、行男の手をつかむ。

重吉　何だよ。
行男　はあ？
重吉　あんちゃんな、病気でもなんでもないんだから。医者なんかに診てもらうことなかったんだよ。明日から、明日から、ちゃんと働くから。
行男　はあ？
重吉　疲れただけなんだよ。父さんが死んでから、お前ら抱えて、寝ないで働いただろ？ガンバリすぎたんだな。
行男　・・・兄ちゃん（と三郎に）
三郎　やめて下さい・・・弟を離してやって下さい。
重吉　お前ら俺に同情しない訳？みんなみんな半人前で、幸次なんかせっかく一流企業に就職決まったっていうのに三年も続かなかっただろ。行男も去年内定取り消されちゃって、あんなに勉強したのになあ・・・お前もお前だ、いつまでやってんの劇団なんか！三十だぞ、三十。嫁さんぐらいもらってみろよ。おまえらの給料

払うために、あんちゃんどれだけ苦労してるか。それがなんだよ、ちょっと疲れて働けなくなると、そんな態度か？ええ？

三郎
行男　・・・・・・

領収書を店員に貰いながら見ていた幸次、意を決して近づいてくる。

幸次　なんですかあなた、やめて下さいよ。

重吉　バカヤロー！

と、幸次を殴る。

幸次　・・・・・・ああああ！なんですか、なんですか、なんですかあ！

店の従業員達重吉をおさえつける。

従業員　店内で暴力をふるうのはやめて下さい。
重吉　離して下さい。止めないで下さい。兄弟なんですから。兄弟ゲンカですよただの。
　こいつらロじゃ判らないんだ。
従業員　なんだそうですか。
　と、一同手をゆるめる。
幸次　違いますよ、何言ってんの！赤の他人です！
重吉　まだ言うか！
　と、幸次に飛びかかる。幸次反撃するが重吉に押さえつけられる。三郎と行男も加勢するがかなわない。
三郎　すごい力だ、こいつ、気違いだ。
行男　どうしよう、母ちゃん呼んで来ようか。

重吉　いいよ。下行くから。あとでゆっくり話してやる。もうお前らクビだ。

幸次　あなた、さっきから何言ってんです？

重吉　幸次、お前もクビだからな・

幸次　・・・あなた・・・一体誰なんです？

と、押さえつけられていた幸次、その言葉に重吉一瞬ひるんだスキを見つけて逃れる。

重吉　あんちゃんお前らともう遊んでらんないよ。

と、立ち上がった重吉を従業員ら取り押さえる。

幸次　あんた誰です？あんちゃん、あんちゃんて？あんた女じゃないか！

と、従業員ら引っ越し屋の制服をひんむくと、青いシンプルなワンピースを着た女が一人立っていた。重吉の顔はしているが、どう見ても女である。

重吉　これは一体、何の冗談なんだ。

従業員の中に紛れていた蕗谷が耳元でささやく。

蕗谷　これでやっとお付き合いできますね。

重吉　あんたは・・・・

蕗谷　蕗谷です。

と、重吉をひっぱってステージにあがる。

蕗谷　♪あなた私を好きかしら

死んでもいいとおっしゃって、

重吉　よせよ！

と、手を振り切るがダンサー達に囲まれる。

歌手　あなた、また新しいダンサー？もう充分でしょ？数だけ増やせば良いってもんでもないでしょう？歌や踊り習わせるのだって大変だし、本当に才能あるんでしょうね。

蕗谷　ある。甲がはってる！

歌手　どれ・・・

と、しゃがみ込もうとするのを

重吉　俺はダンサーなんかじゃない。

歌手　オレって、あんた東北の人？

さっきの子供が家政婦の格好で現われる。

子供　奥さん、だまされちゃいけません。

歌手　あら、キヨさん。

子供　そいつは主婦の天敵です。
歌手　え？
子供　うちの亭主なんか、そいつの為に、もう三年も帰って来やしない。ここまで乗り込んで来るなんて、たいした度胸だね。あんた、私がここにいるの知ってたんだね。
　　私は離婚なんてしませんよ。あの人は夢を見てるだけなんだから、もうそろそろ覚める頃さ。二十五年一緒なんだ、三年なんて短い夢さ。
重吉　何言ってるんです？あなた。
子供　奥さん、その女、今度はあんたの亭主をねらってるんだ。私には判る。判るんです。金も精気も絞るだけ絞り取ったらポイッ！なんだそいつ。
　　自分じゃまだ若いと思ってる四十男をコロリとだますんだ。
蕗谷　おいおい。
子供　（蕗谷に）あんたもうその気になってるね。
歌手　あなた・・・

　　と、どこかのテーブルに座っていた客の一人が帽子を脱ぐ。

勝である。

勝　本当かいい？重子。

子供　あんた！

勝、子供を振り切ってステージにあがる。

勝　嘘だろ？嘘だよね。だって重子は言ってたものね、「私達は世間で言うような不倫の関係じゃありません。肉欲みたいなドロドロした縁でもない。とっても気持ちが合うんです。親よりも兄弟よりも血が濃いみたいな、そんな関係です。二人は二人でいないと一人にもならない双子のような一人です」って。

重吉　ハハハハ。

子供　なんで笑うの？

重吉　だって勝さんでしょ？やだなあ、からかってんでしょう？

子供　（勝に）あんた、目が覚めただろ？騙されてたんだよあんたは。今の若い娘は口がうまいからね。お金の為には何でも言うよ。

働かないでいい暮しがしたいんだから。

勝　重子はよく働くんだ。俺はね、キヨ、食わせて貰ってたんだ。重子がマッサージでかせいだ金を俺がはしからみんな使い切って遊んで暮していたんだよ。でもそれは、重子がそれでいいって言ったからなんだ。でも俺は目が覚めた。

子供　覚めたのね。

勝　ああ、覚めたんだ。これじゃいかん。これ以上重子に迷惑かけちゃいられん。俺が働いて、重子を家に置く。そして、埼玉辺りにちっちゃい家買って、子供作って、犬飼って。

子供　あんた！

重吉　勝さん、別居中の奥さんて、この人だったんですか？

勝　そうだよ、重子。

と「父さん」と声がして、勇が現われる。

勇　みんなあんまり遅いから、長子さんに見に行けって言われて。どうしたんです？あ、かあさん。

子供　勇、この女だよ。父さんつかんで離さないの。この女だよ。
重吉　勇君、何とか言ってよ。みんな変なんだ。
勇　・・・火野さん？火野重子さん？
重吉　え？
勇　そうでしょう？今、御主人が佐和子さんと一緒に下に来てますよ。
重吉　佐和子が、佐和子が来てるのか。助かった。

と、ステージから降りようとする。

勝　どこ行くんだ重子。
重吉　佐和子を連れて来るんだ。
仕事先まで来ちゃうようなあいつの性格が今は役に立つ。
子供　佐和子って誰です？
勇　母さん、母さんがいなくなった三年の間に色んなことがあったんだ。
子供　いなくなってないよ。こいつを見張ってたんだ。
お前、父さんといつから会ってたんだ。

勇　三カ月前からだよ。三カ月前、結婚したんだよ俺。

子供　ええ？

勇　式はしちゃいないよまだ。母さん見つけてからにしようと思ってさ。籍だけ入れたんだ。伸子って、引っ越し屋の娘さ。

　　あ、この人達、伸子の兄さん達。

三人　あ、初めまして。

子供　初めまして。勇の母です。　いつも息子がお世話になりまして、

　　私、のっぴきならない事情でその・・・

幸次　なんだ勇君、やっと式があげられるじゃないか。

三郎　良かったねぇ。いや勇君は働き者でズイブン助かってます。

子供　あんた引っ越し屋手伝ってるの？

勇　うん、アルバイトでね、父さんと一緒に。仕事見つかるまでと思ったんだけど

　　何か、性に合うんだなぁ、ねぇ、父さん。

勝　三月（みつき）前アパート越そうと思ったら、見積りに勇が来るんだもの。ビックリしちゃったなぁ。

勇　ホントだよ、ハハハ。たてのもの横にもしなかった父さんが、洗濯なんかしちゃ

ってさ。この人と同棲してたのかぁ。

子供　何感心してるんだよ。バカ。

勇　そうそう、それで、重吉さんて伸子の一番上の兄さんの嫁さんが佐和子さんて人で、小学校の先生してるんだよ。

その同僚の火野さんて人がね。今日杉並の家のほうに遊びに来てたらしいんだけど、その人がね、三年前に蒸発した奥さんの写真を肌身離さず持っててね、それを見せては泣くもんだから、佐和子さん連れてきちゃったのよここまで、どうしようもなくて・・・俺も、仕事中だったけど、ついついもらい泣きしたくらいなんだから。

子供　その写真の女がこの女だっていうのかい？

勇　そうさ。そっくりなんだ、火野さんの奥さんに。

幸次　何だか複雑な話になってきましたね。

行男　複雑過ぎてついて行けないな。

重吉　それを言いたいのはこっちだよ！

と、勝を振り切って走る。

勝　重子！

と、追うのを子供がつかまえる。

子供　あんた！

重吉の行く手に佐和子現われる。

重吉　佐和子！

佐和子　あなた。せっかくの料理ダメになってしまいましたわ。準備してたら火野さんがお見えになって、話し込んでいるうちに焦がしちゃったの。やっぱりスパゲティじゃダメかしら。

重吉　佐和子、こいつらに言ってくれ、俺が誰なのかを。

佐和子　そうそう、火野さんの車でここまで来ちゃった。だってとっても厄介なんだもの。あなただったら何とかして下さるわね。お義母さん、怒って口も聞いて下さらな

いけど、私だって苦しかったんだもの、火野さんのお相手。

と、小学生（渉と真弓）が二人手をつないでやってくる。

渉　ママ、コンタクトレンズ見つけたよ。

佐和子　ありがとう助かったわ。ママ何にも見えなくて。（とレンズをなめて入れる動作をしながら）下でタンス運んでた伸子さんとぶつかっちゃって、大騒ぎになっちゃった。渉、パパ、火野さんのとこ連れてって。

渉　パパどこ。

佐和子　バカね、そこにいるでしょ？

と、つけ終って重吉を見る。

あなた誰？

小学生の真弓、無言で重吉に抱きつく。

重吉　この子はなんなんだ。

渉　真弓ちゃんだよ。

と、長子がイライラして現われる。

その後から遅れて火野俊一と伸子が現われる。

長子　全くどいつもこいつも何やってんの。男手がなくちゃ運びきれないだろ。幸次！三郎！行男！もう、そうでなくても、面倒引き連れて仕事の邪魔しに来る奴までいるんだから。

佐和子　・・・・・・

長子　早く来るんだよみんな。勝さんまで、どうかしてるよ。

と、去りかける。

重吉　母さん！

長子　ええ？

と、不思議そうに重吉を見る。

子供　あの・・・お母様ですか？

長子　はぁ？

子供　勇の母でございます。

伸子　え？勇さんの？

勇　そう、やっと見つかったんだ。

長子　あら、まぁ。

子供　主人も息子もすっかりお世話になって。

長子　いえいえ、助かってるんですよ、もう息子達がこれだから・・・

火野　どこに行ってたんだ？

一同　・・・・・

火野　どこに行ってたんだ重子、真弓も、真弓も、もう小学生だぞ。

重吉　誰ですか、あなた・・・・

火野　・・・そうか、そうなんだね。記憶をなくしていたんだね。
そうか、やっぱり、事故に合ったんだ。そうだろ？
だから帰る家が判らなくなったんだね。
僕だよ、俊一だ。・・・良かった・・・いいよ、いいよ、何も言わないよ。
病気だったんだからね。少しずつ思い出していけばいいんだから。真弓、良かったな、良かったな。

子供　この人は本当にあなたの奥さんなんですか？

火野　ええ、間違いありません。
この写真、豊島園のフライングパイレーツの前で家族三人で写したんですから。
あいにく回りに人がいなくて、仕方なく自動シャッター使ったら、僕だけこんな後ろ姿ですけど。

子供　だからこんなバカみたいに口あけてんの二人とも。もっといい写真持って歩けばいいのに。

火野　この日帰ったら、家が焼けてましてて、ローンで買った一戸建てですけど、丸焼けでした。だから、重子が写ってんのこれ一枚だけになっちゃって。
焼けたの引っ越してたったの三日ですよ。三日住んだだけで灰になりました。

長子　誰も死ななかっただけ、良かったじゃないねぇ。

子供　ねぇ。

火野　死にましたよ。親二人。田舎から呼んだんです。頭金出して貰った、親孝行のつもりで。親父、足が悪かったから、逃げ遅れたんです。母はきっと父をかばって、それで・・・・

一同　・・・・・・

火野　放火です。畜生、あの学生殺してやりたい。無罪なんですよ、分裂病とかで・・・・くそう、気違いだったら何やってもいいんですかね？ね？

後から菓子折り持って母親とあやまりに来てんの・・・・病気も治りましたからなんて・・・・あきれちゃって何も言えなかったよ。

重吉　あの時、殺してやれば良かった。重子だけが頼りだったんだ、支えだったんだよ。それが・・・・それが・・・・どうなってるんだ一体。どうしてこんな事になったんだろう。

真弓がまた重吉にかじりつく。

火野　うん、うん真弓お母さんを離すんじゃないよ。またどっか行っちゃったら困るものね。可哀そうに、この子は声が出なくなってしまったんです。

一同　・・・・・・

火野　重子の蒸発と、火事のショックで。

一同ざわつく。

佐和子　あんまり言いたくはないんですが、世の中に私ほど気の毒な人間が二人といましょうか。どうですか？皆さん、意見のある人は手を挙げて下さい。どう思います？

火野　火野さん、ここは学校じゃないんだから。

佐和子　ああ・・・仕事しか逃げ道のない暮しだったから、つい。

火野　でも良かったじゃないの、見つかって。

風間先生のお陰です。今日、風間先生のお宅に伺わなかったら重子とは会えなかったんですからね。ほんと、重子がいなくなって、僕の心の拠り所は風間先生だけでしたから。

長子　佐和子さん。あなた。

佐和子　・・・・・・

火野　いえいえ、おかあさん、先生は優しいから時々映画や芝居に付き合ってくれたり、遅くまで話し相手になってくれたり、僕の心を癒してくれていただけなんです。

長子　聞いてませんよそんなこと。

火野　重子、判かってくれるだろ？僕も寂しかったのさ。

重吉　佐和子！

火野　この人には罪がないんだ。

子供　（勝に）あんた、判っただろ？あんたの愛人は、人妻だったんだよ。今度こそ目が覚めただろうね。

重吉　・・・目を覚ましたいのは俺だよ・・・

火野　愛人？

勝　初めまして、砂原勝と申します。

勇　僕の父なんですよ。（と何故かニコニコしている）

長子　えっ？ちょっと待って、やだ、奥さん、まさか。やだ、ホント？

子供　お恥ずかしい・・・・もうこんな大勢の前でねぇ。ホント、うちの恥ですよ。

長子　男ってみんな若い方がいいのかしらねぇ。
子供　お宅もなんかあったんですか？
長子　いえ、もう、昔の事だから、ハハハ、死んじゃってますからもうハハハ。
三郎　ええ？うちの父さんも浮気なんかしたの？
幸次　聞いてないなぁ。
伸子　やだ知らないの？
行男　なんでおまえ知ってんだよ。
伸子　そりゃ、女だもん。あのさ、
長子　伸子！
火野　どういうことなんです？
勇　同棲してたんですって重子さんと。
火野　ウ、ウソだろ？し、重子。
勝　あれは三年前の夏。久し振りで休みがとれたんで、家族旅行にでも出かけたいねと母さんが言うもんで、勇と三人で、私の実家の仙台に、十年振りの里帰り桂島の海水浴場に出掛けては毎日毎日クタクタになるまで泳いだっけ。何日目だったかな、あんまりくたびれたもんで、休憩場で、マッサージを頼んだ

んだ。男と女とどちらがいいですか？って聞かれて、迷わず女と答えてました。
どうせばぁさんにしたって、男にさわられるよりはマシだと思ってさ。
母さんと勇はまだ浜辺ではしゃいでた。いくら泳ぎが得意だからって、あんまり遠くに行かないようにって母さんに声かけて、私は横になっていた。二十分ほどして入って来たのが重子でした。
驚いたよ、こんな田舎で、まだ若い娘がマッサージなんかしてるんだもの。
私は腰なんか押してもらいながら、恥ずかしいやらテレるやら気持いいやらで変な気持ちにならないように、ずっと喋りっぱなしさ。重子の方も愛想が良くて、「血液型は何ですか？」「星座は何？」なんて、私がＡ型だの蟹座だなんて答えると、「どうして、占いじゃ全然相性の悪いタイプなのに、どうしてこんなに合うのかしら」なんて変な事言うから、「合いますか？私達」って私が尋ねると、「合いますねぇ、こんなに気が合う人初めてです。」って言うんだよ。
重子が言うには、マッサージしてると、合うタイプ、合わないタイプがはっきりと判るそうなんです。
ツボを押えた時にこう気を送り込むらしいんだが、この、体のツボの道に重子の気が入り、ぐるりとまた戻ってくる。この具合が私の場合、非常に良いらしい。

これが合わない人だと、ただただ疲れるばっかり、相手も痛いばかりで全く仕事にならんのだそうだ。

重子が言った。「私達、他人とは思えないわ。私もズイブンこり症だけど、あなたを揉んでいると、私まで揉まれているように気持ちが良くなってくるんだもの。ほんとに私達、肌が合う。きっと私達、また会えますね。」不思議な言葉を残して重子は去り、半月後私は東京に帰りました。帰ってからも、あの重子の指の感触が忘れられず、何回かマッサージを呼んだんだが、利かないんだねぇ、他の人じゃ。やっぱり重子が合っていたんだな、なんて思いながら、青梅街道を歩いておりました。

ある雨の日の夜だった。歩道橋に登って、真ん中辺りで立ち止り、煙草あったかな、なんて、ポケットを探り、なかったら、また引き返さなきゃな、ああ、なかったな、引き返そう、自動販売機はあの下だ、なんて振り返り様、向かいのビルの窓の明りが目に入った。治療院らしく白い服をきたマッサージ師達が仕事が終って帰り支度をしているのが見えた。

そして次の瞬間、我が目を疑ったね。重子が窓の外の雨を見ながら、マニキュアをぬっていた。

「重子さん！」私は叫んだ。
重子は別に驚きもせず、しごく当然だというような顔をして、「あら」と言って降りてきたのさ。まるで、雨の日に傘を持って迎えに来た亭主に会うみたいに。まるで自然に私の傘に入った。そしてそのまま、重子のアパートで暮すようになったんだ。

火野　重子はマッサージなんてやりませんでしたよ。いつも僕の方がもんでやったくらいなのに。本当かい？重子。

重吉　・・・・・・

勝　本当さ。家族の指よりも、近い指だもの。

勇　父さん、だいじなことを忘れてましたよ。三年前、父さんが仙台から帰った後も、僕は残って母さんを探してましたよね。僕はまだ学生だったから、大学行かずに残ったんだよ仙台に。だけど、母さんは見つからなかったんだ。

長子　ええ？お母さんいなくなったの、勝さんが同棲してからじゃないの？

勇　違うんですよ。母さんは、桂島で溺れたんです。母さん女学校で水泳の選手だったから、ズイブン遠くまで行っちゃって・・・あんまり楽しそうだったから止めなかった僕も悪いんだけど・・・大波にのまれたまま帰ってこなかったんです。

その日は三人の水死者が出るほど急にしけたんです。警報機が鳴りました。探そうとして途中まで泳いだけど、監視員に止められて、暗くなるまで浜辺で待ったけどダメだった。「母さんは泳ぎが得意だから、きっと別な小さな島にでも泳ぎ着いて波が静まるのを待ってるんだよ」って父さんが言って僕ら二人で半月待ちました。村の青年団の人にも協力して貰って近辺の海の底までさらったけど見つからなかったんです。父さんはもうそれ以上仕事が休めなかったから、先に東京に帰ったんだ。一ヶ月たっても見つからないから、僕もあきらめて帰ったんです。

伸子　どうしてそんな大事な事言ってくれなかったの？勇さん。

勇　母が死んだと思いたくなくて。

長子　死んでますよ、そんな。生きてたら判りますよ。

伸子　じゃぁ、さっきの人は？

勇　だから母さんですよ。あれ？

子供は消えていた。

ハハハ、いないや。

伸子　ほんとに今の人がお義母さんだったの？

勇　そうだと思うよ。ねぇ、父さん。

幸次　いいかげんな奴だなぁ。

勇　ハハハ。

伸子　勇さん東京帰ったらお父さんもいなくなってたんでしょう？

勇　うん。僕、探しちゃったよ色んなとこ。母さんは死んだかも知れないし、父さんは消えちゃうし、苦労しちゃったな、ハハハ。

伸子　偉いわねぇ、勇さんは、明るくて。（と暗い火野と見比べる）

勇　そう？

火野　砂原さん、重子がお世話になりました。つらいけど、こう言うしかないんですよね、僕の立場は・・・病気だったんだから、病気だったんだから重子は。忘れましょう、砂原さん。お互い三年間のことは、ね、砂原さん。

勝　忘れたくないなぁ・・・

火野　重子、まさか君は、夫の僕より、このお年寄りの方を選ぶなんて言わんよね。僕と真弓を捨てるなんて言わないよね？

長子　火野さん悪いけどまた後にしてくれます？勝さん、勇さん、仕事仕事、ホラあん

た達も。

と、皆を引きつれて去ろうとする。

佐和子　お義母さん、うちの人は？

長子　忘れてた。先生。

いつの間にか医者の白衣に変わっていた蕗谷、ステージから振り向く。

蕗谷　もう少し時間がかかります。

長子　六時までに終るかしら。

蕗谷　ガンバリましょう。私も医者ですから。

と、音楽。

重吉　俺は一体どうなるんだ。

と、真弓にしがみつかれたまま。

長子

♪悪い夢を見た　昔　子供の頃
起きあがると側に誰もいない
廊下を走って探したけれど
父さんも母さんもどこにもいない
悪い夢　怖い夢　長く続く廊下
果てのない闇
呼んでも叫んでも誰もいない
ただ暗い廊下

重吉

悪い夢を見た　昔　子供の頃
窓を開けると街の灯は消えて
シンと凍えた夜があるばかり
誰もいない街　風ばかりの街

悪い夢　怖い夢　人のいない街
果てのない闇
泣いても　歌っても
ただ暗い街

一同

悪い夢を見た　昔　子供の頃
ホコリのような白い星が
夜の空に瞬くばかり
誰もいない家　誰もいない街
悪い夢　怖い夢　私はどこに
闇の中に月
赤い月　星の中
私を見ていた

長子達去って行く。
ステージの上に蕗谷と重吉だけが残る。

重吉　あなたは誰なんです？

蕗谷　医者ですよ。やっぱり私を信用してませんね？私なんかこれほどまでに君が好きなのに。

重吉　だって僕は・・

蕗谷　誰ですか？あなたは。

重吉　風間重吉ですよ、引っ越し屋の。

蕗谷　それは確かですか？

重吉　僕は多重人格者じゃありません。あなたは人を狂わす医者ですか？

蕗谷　私はあなたのカウンセリングを続けているだけです。あなたの病気を治すために。もっと胸を開いて、もっと心を、心をあずけてくれなくちゃ。

重吉　僕はもう、あなたが医者だとは思えません。

蕗谷　困ったね。ま、時間はある。お茶ね！

と、さきほどの歌手が扮装を変えお茶を持ってくる。

妻　カモミールでいいんですよね。

蕗谷　ああ、私はコーヒー。

重吉　あれ？さっきの家政婦さんは？

蕗谷　え？

妻　うちは家政婦なんて雇ってませんけど。

重吉　いや子供ですよさっきの。

妻　子供もいないんですよ、欲しいんだけど。

重吉　だから、引きとったんでしょう？

妻　あなた・・・

蕗谷　いいよお前・・・

妻　はい。　（と引っ込む）

蕗谷　女房なんですよ、手が足りないものだから。

重吉　知ってますよ、さっき歌ってたじゃないですか。

蕗谷　・・・・・

重吉　僕をもう帰して下さい。下に行きます。仕事も残ってるし。

蕗谷　まだ終ってないんだが・・・

重吉　なんだか、頭がズキズキする。

蕗谷　じゃぁ、今日はこの辺で・・・明日またいらっしゃい。続きをやりますから、心配なんですよ君のことが。

と、なぜかキチンとたたんであった引っ越し屋の作業服を重吉に手渡す。

重吉フラフラと踊り場に歩いていく。踊り場の他は暗くなる。

踊り場には地球儀がポツンと置いてあり誰かが回してから去ったのかひとりでに回っている。

重吉服を着込みながら。

重吉　あの子はどこに行ってしまったんだろう。散り散りの家族を探す為に月からの目印が欲しいと言ったあの子と、僕はどこかで会ってはいないだろうか・・・昔、子供の頃、父さんも母さんもいない夜、一人縁側に出て月を見あげるのが好きだった。どうしてあんなに寂しかったんだろう。幸せだったのに、幸せのはずだったのに。どうして月を見て泣いていたんだろう。

月の光がまぶしいほどに降り注ぎ、その光を一身に浴びていると、僕はその中に、あの世界に吸い込まれて行きそうになった。
あの時代の月はほんとうに饒舌だった。望遠鏡をせがんで親を困らせたのは、月の魔力から遠ざかるためだった。月の事実を知り、夢物語から卒業するためだった。
僕は何を忘れたんだろう。
僕の意味は何なのだろう。
あの女、あの写真の女を僕はいつか見たことがある。いつだったろう。
さっきみんなが僕と間違えたあの女、あれは誰だったろう。
夜でもないのにどうしてこんなに寂しいんだ・・・

と、土田高子のマンションに変わる。
ガランとした部屋に高子が座っている。そのヒザにさきほどの子供が丸くなって乗っかっている。

重吉

終ったんですか？

高子　ええ、みなさん帰られましたよ。
重吉　・・・・・・
高子　お茶でも入れてさしあげたいけど、どこも、もうカラッポで。
重吉　あれ、君。ここにいたのか。

と、子供に気が付く。

高子　好きですか？猫。
重吉　猫？
高子　うちの猫知ってるんですか？
重吉　どこに猫がいるんです？
高子　ここに、このヒザの上。
重吉　からかわないで下さい。おい君・・・あっ！ぐにゃり・・・
高子　猫はみんなぐにゃりですよ。
重吉　僕にはあなたの猫が子供に見えるんです。
高子　子供じゃないわ。もうズイブンお婆さんよ。三年前に迷い込んで来てから、すっ

かり居座っちゃって、ずっと一緒に暮してます。

重吉　暗くなってきましたね。

高子　出版社の人待ってるんです。約束の時間とっくに過ぎたのにどうしたのかしら今何時？

重吉　時計どっかに落としちゃって・・・

高子　困ったわ、私のも全部パックされちゃった。

重吉　明りもなくて平気ですか？

高子　ええ、今に月が出ますから。

重吉　ここはほんとにいい眺めですね。「ブレードランナー」って映画がありましたよね。あの始めの方の近未来の街の景色、あれみたいだ。

高子　ごめんなさい。映画にはうとくて。

重吉　そういえばお客さんテレビありませんでしたね。今時めずらしいなってみんなで言ってたんです。

高子　嫌いなんです。テレビも映画も。アップになるでしょう、物や顔が。あれがダメなんです。カメラの目が怖いんです。あんな風に物が見えたら怖くていられない。ガリバーが小人の国に行くでしょう？小人の国の小人がガリバーを見た時あ

んな風だったでしょうね。鼻や目や口唇、そして肌のシワ、どんなにか不気味な思いをしたでしょう。私はこの自分の目で見える見方でしか物を見たくないんです。臆病なんですね、きっと。いつも私の目は小人のように小さいんです。

重吉　ビルに明りが灯り始めた。あの小さな明りの一つ一つをアップにして考えたことはありませんか？あなたの嫌いな映画の、ヒッチコックの「裏窓」みたいに色んな見えない生活を思うままアップにして考えると、何だか胸が締め付けられる。どんな人間でも、どんな生き方をしても、笑っていても、叫んでもやがてはいつか消えていくんです。あのタごはんのなごやかな団らんもつかの間の幻。残業の薬剤師のため息も、塾の生徒のノートのラク書きも・・・明りが消えればおしまいだ・・・

高子　あなたが言うのは心の目のアップのことね。心の目なら平気だわ。どんなアップにも耐えられます。醜いアザもシミも細胞の奇形も心の目なら見えないのですもの。

あ、月が出た。

と窓の外に月。子供、猫のようにくねって窓から飛び降りる。

重吉　あっ！君！

高子　大丈夫よ。しょっちゅうなの。猫って不思議ね、十二階のこの窓から飛び降りてもケガひとつしないなんて。人間もそうならいいのに。ダメよ。そんなに身を乗り出しちゃ。

重吉　でもあの子が・・・・

高子　ダメよ、吸い込まれちゃう。

重吉　え？

高子　だから越すんだものあたし。街の景色に溶けちゃいそうで。

重吉　まぶしいですね。月の光がまぶしすぎる。

高子　ここはそうなの・・・・だからなんだか死にたくなるの・・・・

と、ノックの音。

高子　来た。どうぞ。

と、初老の男が入ってくる。

男　遅くなりまして、原稿の方は・・・・

高子　出来ました。

男　めずらしいですな。

高子　だって最後の仕事だから。

男　ほう・・・いい月だ。

高子　私は嫌なの。何だかのぞかれてるみたいで。

男　戦前の月はこんな風だった。

高子　月に戦前も戦後もないでしょう？

男　いやいや、戦後の月はオモチャみたいでね。おや、出かけるんですか？

高子　だって用事も済んだから、行きましょう。

男　お一人ですか？

高子　そうよ。

男　さっき入声がしたようですが。

高子　独り言。カラッポの部屋にカラッポの心、そこにお月様が入り込んだら正気でい

られないもの。

と、去る。男追いかける。そして振り向いてドアを閉める。

重吉ボー然と一人残る。

と、窓から地球儀を抱いた子供が飛び出してくる。

子供　死に神が来たね。

重吉　無事だったのかい？

子供　あの人死んじゃうね。

重吉　誰のこと？

子供　さっきの女の人。死に神に連れてかれた。

重吉　あの人は出版社のおじさんだよ。

子供　あんたなんにも見えないんだ。

重吉　あの人達には僕が見えなかった。

子供　いつもはちゃんと見られていたのかい？みんな何にも見えないんだ。

と中央に地球儀を置いて大きく手を広げる。

重吉　何してんだ。

子供　シッ！歌ってるんだ月の上で。

重吉　聴こえないな。

子供　心で歌ってるんだよ、心で聴きな！

重吉　聴こえない。

子供　片輪だなオジサン。何も見えなくて聴こえないんだ。

　　現代人病だぞ。早く治せよ。

重吉　燃えつきちゃったのかな、この若さで・・・

子供　いくつ？

重吉　三十五。

子供　そんな歳まで生きるからだよ。

重吉、窓の方に歩いている。

子供　よせ、冗談だよ。

重吉　こんなに高いと、つい現実が見えなくなって落ちてもいいように思えるな。

子供　月はもっとすごいよ。あんまり高すぎて、ここが低くは見えないんだ。ちょうどここから見る月のようにね。こんな十二階建ての最上階とはまるで違うのさ。

重吉　最上階？十三階に神経科があるだろう？

子供　この上は屋上さ。あがりたくてもあがれないんだ。棚が高すぎて。猫でもなきゃ登れない。

重吉　・・・・・・

子供　ああ・・・染みるね・・・

重吉　え？

子供　染みるよ。・・・月の光が・・・痛いほどだ。集中しろよおじさん、そしたら歌えるぜ。月の上で。チリヂリになった本当の家族に出会えるんだ・・

重吉　僕の家族はチリヂリじゃないもの。今、一緒に暮してるのが本当の家族なんだから・・・

子供　そんな人いるのかい？ほんとの家族と暮してる人なんか・・・オジサンの病気が

治らないのは、何も見えないからだろ？

重吉　何が言いたいんだ君は、君は何か知ってるの？

子供　・・・ああ・・・言葉が消えていく、僕の体から・・・もういらない言葉なんか・・・

と、手を広げ、目をつむる。

オジサンも、早く・・・・

重吉、子供をじっとうかがっていたが、徐々に姿勢を変えていく。

重吉　この感覚は何だろう・・・ひどい熱病にかかったような・・・それでいてちっとも苦痛のない・・・何かが消えていく。消えて行くのが何なのかも分からない・・・だけど、とてもいい気持ちだ・・・ああ・・・

と、月を残して辺り暗くなる。と、引っ越し屋の作業服を着た人々現われて、舞台を転換してしまう。

と、辺りは一変し、昭和四十年八月の九州福岡県と大分県の県境にあるちいさな村の風景となる。
月夜であるが、結婚の披露宴らしく、着物姿の新郎新婦が、床の間のある座敷に座っている。
新婦はまだ二四歳の長子、新郎は重吉の父動太郎であるらしい。
その回りの動太郎の妹静代。長子の父風間作衛門その後妻ナオミ。そして動太郎の教員仲間の斉藤、地元の魚屋の金杉、巡査の桐山、長子の職場の同僚達が座り、少しはずれて、まだ七歳の重吉、重吉の小学校の担任大田、重吉の同級生の久世光とその父薫が座っている。新郎新婦の前には床が敷かれており、危篤状態の動太郎の母マツが横になっている。
司会の写真館の親父武田鉄夫が、炭鉱節を泣きながら歌っている。一同手拍子を合わせているが、後半もらい泣きしながら一緒に歌う。

武田　（歌い終わって）鈴木い！吉田あ！中山あ！（と号泣してしまう）

斉藤　（小声で）どうしたんですか！

作衛門　二ヶ月前、山野鉱でガス爆発があったやろ？あれで鉄夫さんの同級生が亡くなっ

たとですよ。

金杉　僕は兄が、やられました。

一同　・・・・・・・

斉藤　あらあ・・・

武田　私、本日、司会という分不相応な大役をおおせつかり、こげな御馳走を前にしながらも、朝から何にも食べておりっしょえん。そこにきて、皆さん一杯、もう一杯と私の杯に酒を注いで下さるとです。・・・酔いました。酔ってしもうたとです。本当に、本当に申し訳ありまっしぇん。でも、こげんして長子ちゃんの晴れやかな姿を見とると、あいつらにも、あいつらにも見せてやりたかったっちゃばってん・・・長子ちゃあん！

長子　鉄夫さん、こげな時に式挙げたうちらの方が申し訳ないと思っとる。かんべんしちゃり。こいでも質素にしたつもりやけん。

武田　判っとう判っとう。長子ちゃん、八年も待ったっちゃけんねえ。判っとう。

桐山　鉄夫さん、まだ町長さんも来とらんといしっかりしてくれんな困るばい。

武田　判っとう判っとう。

桐山　鉄夫さんはカメラマンも兼ねとうとですよ。まだ二、三枚しか撮っとらんじゃな

かですか　大丈夫ですか？全部ピンボケなんちゅうことになったら・・・

武田　私はプロばい、何ば言いよっとやあ！

金杉　プロやったらダメだな、泣いたりしとったら。

武田　あんたよう笑っとられるなあ。兄ちゃん亡くなりんしゃったっちゃろ？二カ月前ばい、たった二カ月。裁判したっちゃ何十年もかかるんやろうし、保障もあてにならんし・・・二年前も三池炭鉱で五百人ばっかやられたばっかりで・・・またこげんこつなってから。

桐山　ばってん長子ちゃんのせいで死んだ訳やなかろうもん。

武田　そげんこつ言っとらんめいが。

金杉　そやったら明るく祝ってやろうじぇ。みんなそげん思うて、あん事にゃ触れんようにしとっちゃけん・・・俺やって俺やって本当は・・・

と、急に泣きじゃくる。

桐山　卓ちゃん、死んだ兄ちゃんに育ててもろうたようなもんやけんな。

と、桐山も泣く。

薫　長子さんと動太郎さんのなれそめを教えていただけませんか？

武田　しぇからしかったい！よそもんは黙っとき！

大田　武田さんそげな言い方はなかでしょう。あなた司会なんやから。披露宴盛り下げてどうすると。一生に一度ばい、結婚式は。

武田　そりゃ作衛門さんに対する嫌味ね。

大田、ハッとなる。

武田　作衛門さん二度やったっちゃなあ・・・二度もちかっぱい豪勢な披露宴やったなあ！

ナオミうつむく。

長子　父ちゃん、鉄夫さん酔っとうだけやけん・・・ね・・・

作衛門　あ？・・・・

それを助けるように、

動太郎　長子さんと知り合ったのは、今から八年ほど前で、ええ、御存知の通り私は山形の方で教員をしている訳なんですが。・・・家は農家で・・・私は長男なんですが・・・

武田　長男やなのによく婿養子になれたもんばい。懐のでかか両親や、ねえ。

桐山　いや、ほんとばい・・・

どよめきが起きる。亀治ひくついてる。床のマツ唸る。

亀治　なにも好きこのんで婿にやるんじゃねえんだ母ちゃんがこだなだがら・・・俺もしょうなくて承知したんだ。

マツ　・・・父ちゃん・・・

動太郎　ええ、八年前、修学旅行の引率でですね、九州を回りました折に、長子さんに道を尋ねたというのが出会いの初めでした。

大田　引率者が地元の人に道ば尋ねたとですか？

動太郎　はあ、自由行動の日がありまして、あの、生徒に各自回りたい場所の希望を取って、その希望ごとにクラスは関係なくグループを作ってですね、グループごとに引率者が一人ついて、別行動を取ったんです。私はその、三池炭鉱が見たかったもので、

金杉、泣く。

桐山　三池炭鉱じゃいとこが死んだっちゃもんね。

動太郎　・・・炭鉱希望は私一人だけだったので、私一人で出掛けたもので・・・

大田　あんたの旅行やなくて修学旅行なんやろ？

動太郎　今から思えばそうなんですが、あの時は、生まれてはじめての旅行だったんで、嬉しくてつい・・・

大田　よう他の先生が許しんしゃったね。

動太郎　一度こうと決めたら誰が何と言おうと押し通すたちなもので。周りもあきらめてくれて・・・はい。

薫　あの・・・なれそめのことなんですが・・・

動太郎　旅館が判らなくなってしまいまして・・・二晩泊まったんですが、んだて山形から一歩も外さ出だごとながったんだもの。

と、つい山形弁になる。

薫　長子さんとはどうやって知り合ったんです？どうして結婚まで八年もかかったんですか？どうして長子さんは重吉君を・・・

動太郎　あんた刑事かね？

薫　いいえ。

動太郎　なして標準語喋るんだ。

薫　仕事の都合で去年から越して来たんです。くどいの嫌いなんですよ、都会人だから。

武田　田舎もんはくどかっていうとや！九州と山形ば一緒にすんな！

桐山　鉄夫さん。

動太郎　一緒になったんです俺たち。

金杉　良かったばい、良かったばい、ねえ、ハハハ、

動太郎　（突然）　東風（こち）吹かばあ！匂いおこせよ梅の花あ！主なしとて春な忘れそう！

一同　・・・・・・

動太郎　私は菅原道真が好きであります。私の実家余目（あまるめ）町の家の庭にも、ですから梅の木を沢山、沢山植えてあります。修学旅行を九州に決めたのも私です。なぜなら太宰府の天満宮に参りたかったからです。

静代　あんちゃんが三年生受げもづ時だけだ。九州さ行ぐの。いつもは修学旅行は東京て決まてんのに。みんな言ったっけぞ。東京さ行ぎだがったのにて。あんちゃんの妹だていうだげで、オレ片身の狭い思いしてきたんだぞ。

薫　一教員の思い通りになるなんて、どういう学校なんだ。

亀治　校長が戦時中、俺の部下だったんだ。親の七光りで、九州まで行げだんだ。ほして、それがあだになたのっだな。

長子　あの日天満宮の合格祈願に出掛けた時、こん人と会ったとです。飯鷹旅館はどこですか？って聞かれたっちゃばっってんあんまりなまりがひどかけん、近所の映画館さ連れてっってしもうて、そんついでに今村晶平の「赤い殺意」を観てしもうたとです。　うちも受験勉強でムシャクシャしとったけん、たががはずれて・・・

作衛門　合格祈願に行って受験出来なくなったっちゃけんほんなこつ。

亀治　高校生の一人娘を、ひとりで出歩かせる親も親だな。

動太郎　私は奥手で、その時まで実は童貞でありました。ああいうことをすると子供が出来るなんて知らなかったんです。本当です。体の思うまま、私は自然な行為をしただけだったのです。

長子　実は私もそうなんです。誰も教えてくれんかったけん、まさか、そげん大変なこととはほんなこつ・・・

大田　そいで生まれたんがこの重吉君なんやね？

動太郎　んだ。

大田　そんじゃあ、幸次君もね？

動太郎　その三年後の修学旅行ん時に。

大田　五年前ね？

動太郎　んだ。

ナオミ　もう一人おるとですよね？

大田　え？

ナオミ　まだ生まれとらんばってん。

一同　・・・・・・・

薫　どうして一緒にならなかったんですか？

作衛門　長子は一人娘ばい。家ばついでもらわなんなできん。外には嫁には出せんばい。しかも山形なんて外国も同じばい。

亀治　うちだって長男だ。家をつぐのが道理だべ。

作衛門　百姓やっとらんやろうが！

亀治　教員なんか、いづがやめさしぇるつもりだったんだ。勉強ばりして、菅原道真さかぶれだんだ！なして菅原道真も九州さなんか流さっだのがな。

桐山　ほんならどけんして、今頃んになって、許すことになったとですか？

亀治　・・・・・・・

マツが唸る。

静代　母ちゃんが、母ちゃんが、もう長ぐないがら、死ぬ前に、あんちゃんの晴れ姿みっだいていうがら。

亀治　こいづは昔から、動太郎さ甘くて、しょなえんだ。

マツ　・・・長子さん、丈夫なんぼこ生んでけろよ・・・・

亀治　バガタレ、もう生んでんだよ二人も。

マツ　・・・どごだ・・・どこだ・・・

動太郎　重吉、重吉！

動太郎、重吉のそばに寄り、連れて来ようとする。

重吉　誰や、きしゃん。

動太郎　バガ、父ちゃんだ。

キョトンとして遠去かり作衛門の後ろに隠れてしまう。

ナオミ　しょんなかねえ、幸次を起こしてきますばい。

と、去って行く。

桐山　若か奥さんでうらやましいですなあ。　ほんなこつ。

作衛門　いやあ、ちょっと足りんとですよ。子供も出来んけん、長子だけが頼りで。

と、町長が現れるが、出前持ちの格好で岡持ちを持っている。

町長　いやあ、ほんなこつ遅れてしもうて申し訳なかです。出前が立て込んどって、これ、残りもんの盛り合わせやばってん、お祝いっちゅういうことで。

と、岡持ちから色んな中華料理を出して中央に置く。

眠っていた武田ムックリ起きる。

桐山　町長さんの祝辞ばみんな待っとったとですよ。だけんみんな酔えんで困っとったとですよ。だけんみんな酔えんで困っとったとですよ。

町長　いやあ、すんまっしぇん。

武田　ええ、そいではここで、夜もだいぶ更けてきたばってんが、わが夜明け町の町長さんのお祝いの言葉ば賜りたいと存じます。

町長　うまかねえ鉄夫君、うまかあ、さすが鉄夫君ばい。夜も更けて夜明け町ねえ・・・

武田　うん。うん。

町長　いやあ・・・　恥ずかしかあ。どうぞ。

阿部動太郎君、風間長子さん、御結婚おめでとう。人生の中で今日が一番幸せな時やね。双方の御両親、御家族の方もほんなこつ嬉しゅう、お幸せのことと思います。

マツが唸る。

一同　・・・・・・・

町長　・・・・・・・そう、あ、そう、ええ、ええ、ええ、本日、昭和四十年、八月十一日の大安吉日。

金杉　友引ばい・・・

町長　バカちんが、バアさん死んだらどぎゃんすっと。（と小声で）

金杉　ばってん。

と、身振り手振りで、今日になった訳を説明する。

町長　暑かですなあ・・・とにかく、東京オリンピックのアベベしゃんだってもっともっと暑い国で裸足でトレーニングした結果の金メダルばい。人間、ガンバレば、乗り越えられん壁はないっちゃけん。動太郎君も、長子さんも、これからが大変だ。何ばしょっとね！

つい町長の話を、さっきの続きで動きで説明してしまっていた金杉、そのまま部屋中を走り回ってしまう。

桐山　卓ちゃん、予選で落ちてしもうたけん・・・

金杉　メキシコではガンバルけん。

町長　お前もう四十やろが。

久世薫、拍手する。

一同つられて拍手する。

え？いや、その、長子ちゃん、良かやね、こげんよか人ば見つけて。動太郎君、長子ちゃんばよろしく。

武田　ええ（と立ち上がったのと同時に）

町長　ええ、そもそも、私は、この長子ちゃんの、

と、その時襖が開き、女が飛び込んで来る。松下軽子（実は火野重子の母）である。　前景の重吉に瓜二つの顔である。

一同　・・・・・・

軽子　動太郎。

動太郎　・・・軽子・・・

軽子　なんやおかしい思て学校に問い合わせたら、退職した言われてしもて、色々聞き出すのに苦心したわ。

斉藤　先輩、誰ですか？

軽子　言えんのか？言えないんですか？動太郎さん。

動太郎　・・・・・・

斉藤　披露宴に普段着で、失礼じゃないですか。

と、立ち上がる。

町長　すんまっしぇん。

亀治　動太郎、誰だ？

マッ唸る。

長子　呼んどらんばい、こげな人。

軽子　呼ばれました。呼ばれたんですこの人に。せやから私は来たんです。

動太郎　呼んでないよ。

軽子　声でもない、手紙でもない、別な力で呼んだくせに。

作衛門　動太郎君まさか君は、関西の方にも修学旅行に出掛けたんやなかろうね。

斉藤　先輩は九州だけです。し、しかし、菅原道真は、確か京都にいたんですねえ。

「東風吹かばあ」ですからね。

動太郎　ううう・・・

亀治　お前、京都にも行ったのか。

動太郎　ううう、梅の花を見にい・・・

亀治　バカタレ！

動太郎　主がなくても春を忘れていなかったかどうか確かめたくてえ。

軽子　私は富田林の出身ですが、京都には修学旅行で。

斉藤　なんでそんなに近いとこに。

軽子　私立校が経営不振で、卒業生はたったの十人。

武田　セーラー服ば好いとうとか、あいつ変態みたいやな。ほんなことよかと？ほっといて。

桐山　めでたい席やけん。

軽子　逃げましょう動太郎さん。ほんで、ほんまに、菅原道真の住んでいるとこに二人で行きましょう。

重吉　菅原道真っちゅう人は、今、どこに住んどうと？

長子　バカちん！

大田　重吉君、こっちきんちゃい。菅原道真はとっくに死んでおらん人なんよ。

重吉　したら、あん人達は天国に行くと？

長子　父さん達やろ！

軽子　せやボン、天国に行くんや。

重吉　へえ・・・

と、子役のような哀れな芝居。

軽子　さあ！早よう！

動太郎　ダメだよ軽子、俺には子供が二人も、いや、三人もいるんだから・・・

軽子　あたしの子供は、あたしの子供はどうするんや？

長子　ええ？

と、産気づく。

作衛門　長子、長子、大丈夫や？

長子、唸る。

マツ、唸る。

亀治　マツ、どうした、マツ！しっかりしろ。

作衛門　ナオミ！ナオミ！長子が。

ナオミ、幸次（人形）をおぶって出てくる。

（四歳ぐらいのかなり大きな人形で、手だけ自分の手で代用している）

ナオミ　どげんしても起きんとですよ。

と、人形の頭がマツに見えるようにしてやる。

お孫さんですよ、おばあちゃん、おばあちゃん、

苦しむマツそれどころではない。

あら、どうしたとかいな顔ば見たいって言いよったろうが！見んね！見んしゃいよ！せっかく連れて来たとに。

マツ、苦しむ。

亀治　マツ！マツ！

作衛門　ナオミ、長子が。

ナオミ　え？長子さん、長子さん、まあ！おばあさん、又、お孫さんの顔ば見られますばい、良かったやねえ。

と、襖が開いて軽子の兄、安井猛とその婚約者、原本国子が現れる。二人とも洋服の新郎新婦のいでたちである。

猛　軽子！何やってんねん！

軽子　あ！お兄ちゃん！

国子、花の付いた黒いワンピースを取り出す。

国子　軽子さん、早よこれに着替えて、夜行で早よ戻りましょう。

猛　俺には肉親はお前一人や。お前が来てくれへんかったら格好つかへんのや、判ってるやろ？

国子　軽子さん、今やったらまだ間に合います。橿原神宮に皆さん待たしてありますから。

軽子　アホやなあ、新郎新婦が結婚式抜け出すやなんてうちかて今やったら判らへん思うて、飛び出して来たのに。

国子　マネキンにこんな服着せて、誰かって判ります。今ちょうどお色直しの時間やから、抜け出して来れたんや。

武田　大阪から九州まで往復しとうたらえらい長かお色直しになりますばい。

金杉　ハハハハハ。

猛　面倒臭いからここで続きやってまおうか。

国子　何言うてんねん、はよ、もどろ、軽子さん！

軽子　いやや、うち行かへんもん。ここで動太郎さんと死ぬんや。うちなんか結婚式もあげられへんかったんやもん。

猛　それはお前が身重やったからやろ。

軽子　この人かて身重やないか。

猛　あ！もう頭出とる。サ、産婆さん呼んだ方がええんやないやろか・・・

町長戻って来て、

町長　だめや。今日は、町で五、六件生まれるごとある。一人もおらん、どこも産婆出はらっとるばい。

作衛門　辛抱しい長子、ひっこめろ、ひっこめろ。

亀治　医者はおらんですか？

町長　あっ忘とったちょっと、待っちゃってん。

と、又引っ込む。

猛　国子、お前・・・・

国子　猛さん、でも・・・・

猛　俺達の結婚より、人間の生命の方が大事やないのか？

邦子　猛さん、判かりました。

と、腕まくりをして長子の側に座る。

作衛門　あの・・・・

国子　看護婦なんです私。

作衛門　それは良かった。助かった・・・・

亀治　あの、こっちは・・・・

国子　ちょっと待って下さい。生まれてくる人の方が大事ですから。

亀治　そんな。

猛　こういう話を知っていますか？同じ血縁の中で死んだ人の命日に生まれる子供というのは、その死んだ人間の生まれ代わりやと言われているんです。祖父か祖母、そしてその孫という関係が、統計的には一番多いらしいんですが・・・見て下さい。半分生まれかけている孫、半分死にかけている祖母。なんちゅうこっちゃ。あなた、この赤ん坊は、このお婆さんの生まれ代わりなんですよ。

亀治　ええ？

猛　このおばぁ・・・

亀治　マツです。

猛　そうマツさんは死んで行くんやない。生まれるんです、今ここに、生まれるんですよ。おじい・・・

亀治　亀治です。

猛　亀治さん。

一同　んんんんん。

国子　お湯沸かして下さい。

女達　はい！

と、言って去る。

亀治　あなたの御職業は？

猛　占い師です。（と何か道具を出す）

一同　・・・・・・

猛　あ、松下君が来る。

と、襖が開き、赤ん坊を抱いた松下康好、現わる。

松下　軽子。

と、やはり礼服である。

重子がむずがってしもて。

動太郎　重子。

松下　あ・・・どうも、おめでとうございます。

軽子　あんた、何で来たの。

松下　なんでって、なんで？一緒に来たんやないのここまで。この家の前で重子が泣き出したから、僕がお外でお月様見せてあやしてたんよねぇ、重子ちゃん。

赤ん坊泣く。

軽子　おかしいなぁ、いつもは丸んまるお月様見てるとニコニコするのに、

松下　バァ、レロレロバァ。

軽子　あたしの後ろにずっといたの？

松下　そうや。

軽子　影の薄い人・・・

松下　九州の親戚あったやなんて知らんかったな。披露宴の掛け持ちか？

どうも松下です。軽子がお世話になってます。あれ？

と、長子とマツを見る。

動太郎　この子が俺の子供だな。
軽子　せや、あんたの子。
松下　え？

と、松下赤ん坊を落とす。
と、マツ必死の形相でそれを拾って抱える。

ナオミ　違う違う、おばあちゃん、それ、違う。
マツ　ずんつぁ、ずんつぁ、あの話を、あの話を・・・・

と、重子を抱えながら今にも死にそうである。

亀治　ああ、マツ、マツの一番好きなあれか・・・・
武田　ずんつぁって何ですか？
斉藤　おじいさんて意味ですよ。
一同　へぇ・・・・

亀治　私の本家のひいじいさんは阿部亀治と申します。明治四十年、亀治さんは、今までの古い米の品種改良に成功し、「亀の尾」という新しい山形の米を発明いたしました。それが後のあのうまい米、「ささにしき」「こしひかり」の源となったのであります。

亀治さんはつまり、山形米の父、山形の農家を救った、救世主なのであります。

マツ、重子をきつく抱きながらかすかに笑う。

亀治さんの息子は、分家に賢い子供が生まれたので、この子もきっと、父のように立派な百姓になるだろうと、亀治という名をこの子に授けました。

マツ　それが私、阿部亀治なのです。

ナオミ　ずんつぁ・・・ずんつぁ・・・オレずんつぁみいな立派な人に会えで幸せだったなぁ・・・孫の顔も見れたし。

違う、違う。

と、離させようとするが離れぬ重子。

亀治　マツ！

マツ　オドゴなら重吉、オナゴなら重子て名前つけてけろよ。重なるの重は、オレの父ちゃんの名だからなぁ・・・動太郎。

動太郎　判かってるよ、つけたよ。こっちもついてたよ。

マツ　・・・良かった・・・

亀治　マツ！

動太郎　母ちゃん！

と赤ん坊の声、三郎が生まれる。

医者（町長）現われる。

金杉　遅かったばい先生。

医者　なんだ、前の患者ほったらかして来たのに。

金杉　町長さんは？

医者　お通夜だって。

松下　軽子ひどいで。僕の子やいうから一緒になったんやないか。

動太郎、赤ん坊を死んだマツから引き離そうとしている。

動太郎　君は何や。こういう人がありながらどうしてこんな・・・

軽子　一回だけの、ほんの浮気でした。

ほんの？ほんの浮気？重子ちゃん、あんたのお父ちゃん軽いでぇ。

軽い子はうちのはずやったのに。

斉藤　軽い子と書いて軽子というんですか？

軽子　そうです。子供の頃から惚れっぽくて、色んな男を好きになりました。心ばかりやなく身も軽く、いつもフットワークがいいと、バスケットのコーチにも言われてた。

あの時はまだ十九でしたが、今度こそと思ったこの人に身も心も重くしてすべてを捧げ尽くそうと思った矢先に裏切られ、せやけど子供は裏切らず、私の中で大きくなりました。

あわてた私は、この子の為に、別に好きやなかったけれど、その頃私に気があっ

たこの松下を丸め込み、この子の父親になってもろたんです。
生まれて来た子は、うちの人生を歩まんように、重い子と書いて重子と付けました。

斉藤　偶然だったんですねぇ。

松下　軽子、そりゃないで。

軽子　あなた、かんにんね、愛せなくて。

松下　まてまて。

猛　松下君、帰ろ。

松下　そやけど義兄さん。

猛　君は元々運が悪いんや。考えよう僕と一緒に。何かええ手を考えよう。名前を変えるとか、判子作るとか、ね？

松下　せやけど義兄さん、僕は軽子が好きなんや。

猛　軽子といるともっと運が逃げるで。

国子　僕なんか占いでこいつ見つけて、ほんま幸せや。な国子。せやね。街で突然指差されて占われた時は気色悪かったけど、ほんまによう当たるんやもの猛さんの占い。だいいち、占いでここまで追っかけて来たんやから。

信じられへんわ。初めての場所やのに。

軽子　あたしの未来が、兄さんに占える？

猛　凶と出てるな。今戻れば吉となる。

軽子　キョウなんてこわないわ！明日があるもの！

動太郎　明日になっても俺は変わらない。

軽子　でもうちはここを動かへん。この家の漬け物石になってでも動かへんから。

ナオミ　家、漬け物漬けんっちゃん。臭いから。

作衛門　動太郎また男の子ばい。

猛　この子はきっとええ子に育ちますよ、国子が取りあげたんやから。占いにもそう出てる。頭が良うて心が優しい。

作衛門　ありがとう、君の父さんの名前は？

猛　三郎です。

作衛門　よし、もらうよその名前ば。

静代　（軽子をひっぱって）あんた、山形さ来ねが？家に入ってくれるなら、協力してやってもいいけど。

軽子　え？

静代　あんちゃんが養子になると、オレがどごさもいがんねぐなるんだ。
卒業したら東京さ行って、好きな事したいんだ。
家さ縛られたくないもの。夢を見たいんだ。

軽子　夢って？

静代　カス。

軽子　カス？

静代　歌手！

軽子　いいわね、夢があって。

静代　実現しない夢なんてしょせんアブクだ。あんちゃんが養子になってアブクになったんだ。あの長子のせいで。
あんたここでずっとあの二人の邪魔してんだべ。すろ、応援すっから。
あんちゃんがあぎらめて山形さ帰って来たら、オレが出でぐ。
あんちゃん離すんじゃないぞ。必ず山形さ来いよ。

軽子　軽い関西人が重い山形で暮せますか？

静代　表裏一体という言葉あんべ。きっと山形が好きになる。あんたずっと一人で喋ってられるぞ。みんな無口で聞き上手だ。

軽子　あんたもずっと喋らへんかったものね。

静代　喋りだすと話がなかなか次に進まなくなるからな、ガマンしてたんだ。

いつの間にか葬儀屋が来て、部屋をテキパキと片付けている。

軽子　あんた・・・

静代　静代。

軽子　静代ちゃん、あたし動太郎さんを離さへん。

大田　あら？重吉君は？

薫　うちの光も・・・

武田　ささ、お開き、お開き。桐山さん、飲み直ししましょっか。

桐山　そうやね、卓ちゃん。

長子　動太郎さん・・・

動太郎　長子、逃げよう。

長子　え？

動太郎　軽子から、軽子から逃げるんだ。

どこか別の場所に七才の重吉と久世光がいる。
他は暗くなり、お経が聞こえている。
空には月。

重吉　どうした？光君。
光　僕と君とは親友だよね。
重吉　うん。親友。
光　だから、君にだけ話しておくよ。
重吉　なん？
光　先月死んだろ？
重吉　え？誰が？
光　江戸川乱歩と谷崎潤一郎だよ。
重吉　誰？親戚の人？
光　君は本が嫌いなの？
重吉　好いとうよ。シュバイツァー物語とか。ツタンカーメン王の秘密とか。ファーブ

ル昆虫記もかな、でも絵んとこだけ見るっちゃん。字だけの本とか好かん。君は七つでもう漢字が読めると？

光　乱歩と谷崎が死んで、僕はなんだか生きて行く気が失せたんだ。

重吉　あ、江戸川乱歩って、「怪人二十面相」とか、「黄金仮面」書いた人やろ？

光　「芋虫」や「陰獣」や「孤島の鬼」を書いた人だよ。

重吉　読んだと？

光　面白かったよ。僕にもこんな作品が書けたらって思うさ。

重吉　僕ら小学校一年生やもん。無理やもん。

光　生まれて七年かぁ、長かったよ、僕には・・・

重吉　ええええ？

光　僕はね、もうすぐ死ぬよ。

重吉　・・・・・・

光　疲れたんだもう、こんな世の中に。父さんが新聞記者だから、同じ土地には二年といないけど、どこに行っても、小説より面白い事なんてないのさ。

　　さっきの騒ぎをどう思った？

重吉　どうって？

光　僕は女なんか知りたいとは思わないよ。限りある物なんか好きになれないさ。

重吉　良く意味が判らん。

光　判かってるんだよ。君にはまだ良い言葉が浮かばないだけなんだ。

重吉　あっ。

光　え？

重吉　なんやお月様やんか、・・・今、背中を押されたように思ったんは、お月様の光やったっちゃな。

光　ホラ、君だって感じてるんだ。永遠の力を。あれをごらんよ。きれいだろ？そりゃ、お月様だっていつかは死ぬには違いない。けれどその時はこの地球だって消えるんだ。だからあれは永遠といってもいいだろうな。僕らの時間の観念の中ではね。

重吉　ほんと、きれいやが。どげんしてあんなに光っとうとかいな。

光　反射してるのさ。この世のすべての光をね。だからあんなに透明なんだ。あんな物があるのに、どうして大人達は、愛だの恋だのと、刹那の時間に追われるんだろう。

重吉　でも僕、母さんを好いとっちゃん。あの男の人は今日初めて会ったけん怖いばっ

かりで良い人には思えんちゃばってん、母さんは、丸くて、あったかで、好いとっちゃん僕。

光　僕はね、冷たくて、遠いものが好きなんだ。

どうしても手には入れられない透明な物がね。

重吉　光君は、お母さんを好かんと？

光　・・・・・・

重吉　死んだと？

光　捨てたんだ撲を。僕も父さんも妹も捨てられたのさ。引っ越しに疲れたんだって父さんは言ったけど、僕はそうは思わない。手を伸ばせば触れられるような生温かくて甘いもんが好きだっただけさ。何が本当の事なのか考えもしなかったんだ。

重吉　本当のこと？

光　風間君は、僕が好きかい？

重吉　好いとう。大好き。

光　・・・僕もさ。

重吉　良かった光君は僕があんまりバカやけん、時々好かんごとなるんやないかと思っとった。だって、嫌な顔して何も喋らんごとなる時があるやろ？

光　あれはね・・・あれは君が、僕の心を知らないから、時々寂しい思いをするから

なんだ。

重吉　そしたら教えてよその心って奴を。

光　・・・いいよ。秘密さ。

重吉　変なの。

光　僕ら似てると思わないか？

重吉　そうかなぁ・・・

光　きっとそうなんだよ。

重吉　じゃあ兄弟みたいにずっと一緒におれたらいいね。

光　君にはできないさ、そんなこと。

重吉　できるよ。

光　じゃあ、もし僕が死んでも僕のこと忘れないかい？

重吉　忘れん、忘れるわけないやろ？

　　ばってん死んだりせんよね。

光　僕は死ぬ。

重吉　いかんばい。

光　いいかい？人は、生きるか、死ぬか、どっちかを選ばなくちゃいけない。そうでなきゃ意味がないんだ。僕は死ぬよ。もう生きたくないんだ。でもね、この体は消えても、本当には死なないんだ。この世界が嫌になっただけなんだからね。

重吉　ほんと？

光　君が呼んだらいつだって僕は君の前に現われるから。

重吉　ほんとや？

光　ほんとさ、だから僕が死んでも泣く事はないよ。僕にはそれがいいんだから。

重吉　判ったよ。信じるよ。

光　僕を忘れないだろうね。

重吉　忘れんよ。

大田と薫現われる。

大田　重吉君。もう夜が明けようばい。

薫　光、帰ろう。

大田　ホラ、お月様も消えんしゃった。
重吉　ホントだ。
光　・・・・・・
薫　光、話があるんだ。
光　・・・・・・
薫　秋にね、東京に転勤になる事になったんだ。
重吉　ええ？光君。東京に行くと？
薫　重吉君、光と仲良くしてくれてありがとう。手紙書いてやってくれよ。
重吉　うん、書く。でも僕、光君ともっともっと色んなことば話したかったぁ。
薫　重吉君は光が好きかい？
重吉　うん、友達ん中でいっちゃん好いとう。
薫　良かったなぁ光、やっと友達ができて。
大田　でも転校するっちゃね。可哀そうやね。
重吉　先生、人は死んだらどうなると？
大田　死んだら・・・死んだら、そうやね、お月様の国の住人になるとよ。見たくない物は見んでもいいし、聞きたくない事は聞こえん、なんもない国の人になるんや

ね。

重吉　光君は・・・

光　シッ！（と重吉をひっぱる）

薫　光、大田先生がね、一緒に来てくれるっていうんだよ。

光　・・・・・・

董　光のお母さんになってくれるんだ。

重吉　ええ？よかぁ光君、ばってん先生もいくと？それは嫌やなぁ、ずるかぁ光君。

大田　重吉君も遊びに来いね。

薫　重吉君、本当にありがとう、さ、行くよ。

光　・・・・・・

大田　さようなら重吉君。

重吉　・・・さようなら・・・

三人去って行く。

光、振り返ってしばらく重吉を見ている。そして走って消える。

引っ越し屋が来て、舞台を転換して行く。

辺りは昭和五十年の東京に変わる。
ボロアパートの四畳半。
引っ越しの荷物がダンボールに積まれている。
ミカン箱の上に色んな食器が乗っている。
湯飲み茶碗を梱包してしまったらしく、動太郎、長子、松下、猛、国子が茶碗やお椀、皿等でお茶を飲んでいる。
幸次、三郎、行男、伸子、が騒ぎながら、そこらを走っている十七才の重吉、受験勉強をしている。

動太郎　また引っ越しかぁ・・・

長子　もう百五十回目ですね。

動太郎　でも助かるなぁ、猛さんが占いでいつも軽子が来るより先に知らせに来てくれるから、この十年一度も会わずに済んでるんだ。

猛　こうなったら意地ですよ、この引っ越し占いがはずれたら、私は占い師を廃業します。

国子　でも、お金がかかって大変だわ。動太郎さんに知らせに行く交通費を稼ぐために

だけ毎日働いているようなものだもの私たち。

猛　今回は同じ東京で助かったなぁ。

国子　でもねぇ、占いで忙しすぎて、子供も作れませんようちは。

松下　俺も子供が欲しいなぁ。

長子　松下さん、諦めて他の方と結婚したらいいじゃありませんか。

松下　こっちも意地なのかなぁ・・・今日の夜、みんながいなくなった後、僕は一人でこのアパートの前の電信柱に隠れて軽子が来るのを待ち伏せしている。軽子が来る。哀願する。逃げられる。追いかける。ヘトヘトになる。猛君に電話する。三カ月ほど厄介になる。

国子　ほんと厄介。

松下　すると、猛君の指が、モゾモゾし始める。日本地図に指がひとりでに吸い寄せられる。吸い寄せられた部分の地図の拡大図を広げる。また猛君の指がモゾモゾする。吸い寄せられる。おっ！軽子がもうここまで来て居る。動太郎君ちには電話がないし、もし電報でも打って、電報屋の後ろに軽子がくっついていて動太郎君ちを探し当てたらたまらんしで、僕達はこうして変装し三人一斉に飛び出して電車に乗り、船に乗り、バスに、タクシーに乗って知らせに行く。そして又私が待

ち伏せる。

国子　百五十回、なんか・・・趣味の領域に達したというか・・・生き甲斐みたいになっちゃったのかなぁ・・・・

猛　やめて下さいよ。

松下　結局十年、松下君と暮しちゃったなぁ・・・・

国子　スミマセン。

松下　でも、給料全額入れて貰っちゃって、悪いわよねえ。

長子　旅費の足しにと思って。他にする事ないし。

松下　競馬でスッたりするよりはマシでしょうけど。

一同　競馬？何です？それ。

長子　・・・・・・

松下　馬が走って競争するんですよ。何にも知らないのね。教員のくせに。

猛　倫理社会が専門なもので。

動太郎君。引っ越し、これから東京都内だけにしませんか？東京は人が多いから、大丈夫だと思うんですよ。私達も、もう東京に落ち着くことにしたし、やれ福島、山口、佐渡ヶ島じゃ、ほんと、もう、こっちも金が続かなくて。燈台元暗しって

いいますからね。二件隣り辺りに引っ越してフェイントかけたり、元の家に戻ったりね、範囲狭めましょう。

長子　すみませんねぇ、迷惑ばかりかけて。

猛　昔から、俺は軽子に縛られる運命なんだな。親を早くに亡くして、二人でずっと肩寄せあってきましたでしょう？軽子をあんなにしたのは俺じゃないかって考えると、軽子を殺して俺も死のうかなんて思うことさえありますよ。

国子　あなた・・・

動太郎　元はと言えば私の責任です。若かったとはいえ、ついフラフラと・・・

長子　フラフラしすぎなんですよ、あんたは・・・

動太郎　でも軽子さんには吸引力があったんだ。何か人を引きつけずにはおかない、不思議なものが・・・

長子　・・・・・・

猛　まっすぐなんです。門が広いというか、何でも沢山受け入れて、そして沢山吐き出すみたいな。惜しみなく奪い、惜しみなく与え、そして惜しみなく捨てるそんな子でしたよ昔から。それがどうして、動太郎君には、あんなに狭くなるんだろう。どうして他が見えなくなるんだろう。

国子　嫉いてんですよこの人、軽子さんが好きなものだから、だから動太郎さんに会わせたくないんです。

猛　バカ、妹だろ。

国子　だからかえってそうなのよ。

長子　ミカン食べます？

松下　食べます。

一同　・・・・・・

動太郎　お陰で引っ越しがうまくなったなぁ、もう、手際が良くって、あっという間だ。

長子　ほんと、子供達も馴れちゃって、その辺の大人よりうまく梱包しちゃうのよ。

動太郎　少しも苦じゃないものねぇ、荷物も増えたのに。

長子　引っ越し道具がこの子達のオモチャなんだもの。

動太郎　引っ越し屋でもするか。

一同　・・・・・・

長子　引っ越し屋？

動太郎　ああ、引っ越しで鍛えられたこの腕を、そのまま生かせる仕事じゃないか。

猛　なるほどね。

松下　カザマ運輸なんて、素早そうですものね。

動太郎　このままじゃ、借金も増える一方だし、重吉も大学入れてやりたいし、猛さん達にも悪いしなぁ。

猛　俺達のことは・・・

動太郎　いや、今までの交通費、いつか必ずお返ししますから。私達も冬にストーブぐらい買いたいし。

松下　うちも買いましょうよストーブ、こたつだけじゃ寒いですよ。

国子　うちってどの家？

松下　猛さんち。

重吉、本類を持って立ち上がる。

長子　重吉、どこ行くの？

重吉　うるさくって勉強してらんないよ。図書館行ってくる。

長子　六時には出るからね。

重吉去る。

と、裏口から桐山が入ってくる。血相を変えている。

長子　桐山しゃん！

桐山　シッ！（とドアの外を見たりする）

動太郎　こっちの方に来てたんですか。

桐山　追って来たんです。

国子　何を？

桐山　殺人犯です。

猛　というと、あなた刑事になったんですか？

桐山うなづいて指を口にあてる。

桐山　すぐにここを出た方がいい。

猛　私ら関係ないでしょう？

桐山　あるんです。だから、来たんです。

松下　軽子ですか？

桐山　そうです。もうそこまで来ています。

国子　でもどうして桐山さんが？

桐山、後ろを向く。

すると背中にナイフが刺さっている。

一同　ああ！

桐山　刺されたんです、軽子に。

一同　・・・・・・

桐山　動太郎さんと間違われて、「ごめんなさい、後ろ姿が似ていたもので」と謝られました。さ、早く逃げて下さい。

猛　桐山さん、どうしてわざわざここまで来るのかなぁ、それじゃあこの場所を軽子に教えたも同然じゃないか。

桐山　あ、そうか・・・（と絶命する）

一同　・・・ああ・・・

と、一同立ち尽くす。

長子　あなた・・・

動太郎　こうしちゃいられない・・・・　早く逃げよう。

長子　重吉が・・・

松下　僕が後で迎えに行きますよ。猛さん、桐山さんを起こして下さい。

猛　ええ？

松下　動太郎君、服を脱いで、桐山さんと交換するんだ。

動太郎　・・・・・・

松下　窓の外から、軽子が伺った時、まだ動太郎君がここにいるように見せかけるんですよ。

一同　・・・・・・

松下　後ろ姿が似てるんだから。

猛　悪知恵が働くなあ・・・

国子　急に生き生きしちゃって・・・・

松下　いいから早く。

アパートの前、重吉が帰ってくる。

と、電柱の陰から女（軽子）現れる。重吉すれ違おうとして、二人何度も同時に動き、すれ違えない。仕方なく向かい合って立ち止まっている。

軽子　重吉さん？

重吉　誰ですか？あなた。

輕子　忘れたの？あたしよ。

重吉　さあ・・・

軽子　こんなに気の合うあたしを覚えてないなんて。

重吉　あ、血が・・・

軽子の手袋から血が滴っている。

怪我したんですか？見せて下さい。

軽子　何でもないわ。今、レバーを料理してたから。
重吉　好きなんですか、レバー。
軽子　無理して食べてるの。貧血症だから。
重吉　家で手を洗って下さい。すぐそこですから。
軽子　・・・・・・
重吉　顔が真っ青だ・・・貧血、ひどいんですか？
軽子　びっくりしちゃって・・・ズイブン血が出るんだもの。
重吉　家で休みますか？うるさいけど。
軽子　優しいのね、重吉さんて。肩こる？
重吉　は？
軽子　お礼にもんでやろうかと・・・
重吉　は？
軽子　マッサージやってるのあたし。
重吉　見えませんね。
軽子　これは外出着、クリスマス・イヴだもの。
重吉　・・・雪だ。東京に来て初めての雪だな。

と、空に満月。

あ、満月。

軽子　師走のお月様は青い色ね。

と、サングラスをかける。

重吉　何です？夜なのに・・・

軽子　満月の夜はたまらないの。ひとりじゃいられない。誰かが側にいないと、自分が誰か判らなくなる。重吉さん、一晩一緒にいてくれますか？

重吉　おばさんとですか？

軽子　まだ、三十よ。

重吉　僕十七です。

軽子　いいじゃない。満月の夜だもの。

重吉　でも母さんに叱られます。

軽子　あんたの母さんなんか十七であんたを生んだのよ。
重吉　知ってるんですか？母を。
軽子　・・・昔馴染み。
重吉　何だ。じゃ、早く行きましょう。

と、軽子を引っ張って戻ろうとした時、声が掛かる。
久世薫と大田先生である。二人とも黒服である。

薫　重吉君・・・
重吉　え？
薫　随分探したよ。十年振りだね。
重吉　・・・・・・
大田　あの日も満月だったわね。
重吉　・・・あ、大田先生・・・
大田　光君のお父さんよ。覚えてるでしょ？
重吉　光君？

薫　この日記をね、君に渡したくて・・・光に頼まれていたんだよ。十年経ったら渡して欲しいと、遺書に書いてあったのさ。

重吉　遺書？

大田　死んだのよ光君。あなたには知らせないよう書いてあったの。そういえばあの時もこんな満月だったわ。東京に来てすぐ、高いビルから飛び降りたのよあの子。どうして自殺なんか・・・とうとう一度もお母さんて呼んでくれなかった。

薫　重吉君、君は何か知っていたんじゃないのかい？あの日、光は、君に何か言わなかったかい？

重吉　・・・・・・

薫　それならいいんだ。これ。

と、日記を手渡す。重吉手に取って開き、読み始める。

重吉　「これを読んでいる頃、君は僕のことを忘れているだろうね。思った通りだ。僕が君を思うほど、君は僕のことが大事じゃないのさ。

約束した通り、僕は死ぬ。でも君は僕の約束が果たせなかった。だから僕、今も

まだ、何もない世界で、起きることも眠ることも出来ずに、いないままにいる。
でも仕方ないね。僕は死んで君を捨てたんだから。だから君も僕を捨てたんだ。
だけど、僕は忘れないぜ君のことを。君が僕を思い出せなくても」

薫　この約束というのはどんな約束だったんだ？

重吉　・・・思い出せないんです・・・

大田　あなたの御両親の結婚式の夜のことよ。

重吉　あの日のことだけ、どうしても思い出せないんです。気が付くと列車に乗っていました。何かに追われるように、僕らはいつも移動しているんです。

大田　子供にはあの日の騒動が耐えられなかったのね。だから忘れようとする気持ちが働いたんだわ。仕方ないわ。行きましょうあなた。

薫　重吉君。思い出したら連絡してくれよ。

重吉　・・・そうします・・・

二人、去る。

電柱に隠れていた軽子、顔を出す。

軽子　ああいう風に、いかにも支え合ってる感じの夫婦って、メチャクチャにしてやりたくなるわ。

重吉　でも何だか不幸そうでした。そしてそれには、何か僕が関係しているようなんだ。

軽子　子供はみんな感じやすいからね、その子は生きられなかったのよ。あんた先に生きるために、あの日のことを忘れたんだ。

重吉　光君・・・名前も、顔さえも思い出せない。

軽子　この子はあんたに恋してるね。

重吉　男の子なのに？

軽子　子供の恋だもの。男でも女でもない、激しい恋さ。

重吉　あたしには判るよ、満月だから。

中に入りましょう。

アパートの部屋。電球が一個ついている。

誰もいない。桐山がミカン箱に突っ伏している。

父さん・・・

と、桐山の肩に触れると、桐山くずれ落ちる。

軽子　ああ・・・

重吉　しまった！だまされた。

軽子　何です？

重吉　いえ、何でも。

軽子　こんなに血が・・・警察に知らせないと・・・・

重吉　ダメよ！

軽子　え？

重吉　お父さんがやったのかも知れないわよ。

軽子　え？

重吉　お母さんかも・・・・

軽子　まさか・・・

重吉　だって誰もいないじゃない。

軽子　それは、引っ越したからだよ、・・・ああ！僕、家が判らなくなっちゃったよひど

軽子　いなぁ・・・みんな・・・

軽子　とにかく死体を隠さなきゃ・・・

重吉　どこに？

軽子　ええと・・・押し入れかな・・・

と、押し入れを開けると、松下が座っている。

松下　・・・・・・

軽子　あんた・・・

重吉　あれ？松下さん。

松下　重吉君。遅かったね。しかも君は軽子の共犯者だったのかい？

重吉　はぁ？

松下　死体の頭持ってるじゃないの。

軽子、持っていた桐山の足を落として走り去る。

松下　あ、軽子！

と、追いかける。

重吉　松下さん、待って下さい。どうなってるんです？軽子さんて、あの、この死体は一体、あの、僕の今度の家は、あの、

松下　後、後！

と、走って消える。

重吉　松下さん

と、追いかけようとすると、出前持ち現われる。

出前持ち　お待ちどう様！あれ？

重吉　あの・・・

出前持ち　お客さん一人？焼きソバ十人前よ、一人で食うの？ああ、もう一人・・・起こした方がいいね、その人。三千円ね、はい、お金。

重吉　持ってません。

出前持ち　困るなそういうの・・・　大至急なんて言っといて、

と、岡持ちを壁際に置き、中に入る。

重吉　引っ越しちゃったんです。あの、後で必ず払いに行きますから・・・

出前持ち　そっちの人は持ってないの？あああ！病気だねこの人、血を吐いてる。帰るよ結核はうつるからね。

戸口で振り返り、

明日来てよ、必ず、もうすぐ終るから・・・心配なんだよ、君の事が・・・

と、去る。

重吉　あの・・・岡持ち。

と、岡持ちを開ける。
すると中から黄色い服を来た小人達が沢山現われる。
陽気に何か喋っているがよく判らない。
驚く重吉。
小人達、桐山の死体を運び去る。

重吉　これは・・・

最後に初老の男が現われる。

男　あなたは・・・
君は？
重吉　重吉です。　風間重吉。

男　どうしてこんなところに来たんだね。

重吉　来たって、いますよさっきから。

男　変だな。君は人間のようだが・・・

重吉　まさか、サンタクロースだなんていうんじゃないでしょうね。煙突の代わりに岡持ちから出て来たなんて・・・

男　帰りなさい。ここは君なんかの来るところじゃない。

重吉　ここがどこだっていうんです？

男　月さ。

と、男が言うと、辺り一変し、月の砂漠が広がっている。小人たち、再び現れ重吉を縛り上げどこかの天井につるし上げてしまう。

重吉　あああ！

と、重吉の姿は一時見えなくなる。

男　さて、もうこれで巨人族は絶滅しただろうね。

小人1　そのはずですが。

男　長い戦いだったな。

小人2　本当に、千年をかけた戦いの歴史に今、ピリオドを打ちました。

小人3　あの者はどういたしましょう、どうも巨人族には見えませんが。

男　うん、私のように、巨人と小人のハーフでもなさそうだしね。

小人4　人間ではないんですか？

皆、どよめく。

男　うん、私にも実はそう見えるのだよ。

小人5　しかし、人間に私達が見えるはずがないでしょう。

男　ううむ・・・降ろしてみなさい。話を聞いてみよう。

と、ロープを降ろす。

重吉、降ろされる。降ろされた重吉は、元の中年の重吉に変わっている。

君は何者なんだね。

重吉　さっき言ったじゃないですか。

男　とすると、やはり人間なんだね？

重吉　当り前じゃないか。

男　当り前ねえ。

小人達、ざわつく。

重吉　君達は人間じゃないとでも言うのかよ。

小人達、笑う。

男　じゃあ君には私達がどんな風に見えているんだね。

重吉　人間に見えるよちゃんと！

一同、笑う。

男　ここには酸素がないんだよ。どうして君は宇宙服も着ないで生きていられるのかなあ。

重吉　ここが月な訳はないだろ？月はあそこに・・・

と、振り向いて指さすと、そこにあるのは大きな地球であった。

小人ー　あああ！地球だあ・・・

こんなバカな・・・

本当に人間かどうか、調べてみよう。

と、重吉のガクランを脱がせる。

重吉　よせよ、何するんだ。

と、中に引っ越し屋の作業服を着込んでいる。

小人２　これは何だ。

重吉　引っ越し屋なんだよ。

小人３　さっきのは？

重吉　ガクランだよ。

一同　・・・・・・

重吉　学生服！

男　君はいくつなんだ？

重吉　三十五。

一同　・・・・・・

男　不思議な人間だ君は・・・

重吉　僕はさっきまで、回想の世界にいたんだ。七歳、そして十七歳の僕を回想していた。だから僕は、僕が今まで忘れていた過去を今、はっきりと知ることが出来た。でも、どうして、回想のガクランを僕は着込んでいたんだろう。

男　どうしてかね？

重吉　聞こえたんですか？僕の独白が。

男　当り前だろ？

重吉　だって心で言ったんですよ。心の声が聞こえるはずないもの。

男　人間は、だろ？

重吉　・・・・・・

男　私達の五感は人間とは違うよ。ねえ。

小人達、笑う。

君は私達の声を耳で聞き、私達の姿をその目で見ているのだと錯覚しておるようだが、我々はそんな簡単なものではないんだからね。我々には、君の声も心も同じように聞き、見ることが出来るんだ。

重吉　誰なんです？あんた達は。

男　そういうことを我々に聞いちゃいかんよ。私達は誰かではないんだから。

小人Ｉ　人間は自分らが王様だと思っているんだな。

小人２　人間の言葉や価値観が宇宙でも通用すると思ってる。

小人３　こんな奴ほっといて出掛けよう。

小人４　早く国に帰らないと、そろそろ砂嵐がやってくる。

男　よし、巨人のいない平和な時代がやって来たことを国中に伝えよう。

重吉　巨人だの平和だのっていい年して恥ずかしくないの？

男　恥ずかしくない。巨人のいない平和な時代！何度でも言えるのさ。別に私が阪神ファンだから言ってるんじゃないんだよ。さっきやっと、最後の巨人をやっつけて、この星に実に千年ぶりに平和な時代がやって来た訳なんだから。

重吉　巨人というやつは悪者で、あんたらがそれをやっつけたという訳なんだな。

男　んんん・・・どうなんだろう。

と考え込んでいる。

小人１　早く出発しよう！王子が眠る前に。

重吉　王子がいるんですか？

小人２　うん。

重吉　どこに。

小人３　知らん。

重吉　何で？

小人４　見たことないから。

小人５　早く行こ！

重吉　判らんなあ。

男　いやね、その王子が目覚めている時しか、私達はこの場所にいられんのだなあ・・・

重吉　眠ったらどうなるんです？

男　悪い夢が支配するようになる。巨人というのは、その夢の残骸なんだよ。

私達は、王子の夢の廃物処理係といったところかねえ。

重吉　でも、これは、現実なんでしょう？

男　現実？

重吉　現実と、夢のなごりが同時に存在するなんてあるのかなあ。

小人達、ざわめく。

小人1　人間て奴はおかしなことを言う。
小人2　夢が現実でないと言うのかい？
小人3　じゃあ、僕らは嘘なのかな？
小人4　違うよ。こいつが嘘なんだよ。
小人5　そうだな。ここにこんな奴が現れるはずがないんだから。
小人1　僕ら夢を見ているのかな。どうだい？
男　いや、私にはさっぱり。良い夢の皆さんが判らないことなど、どうして私に判りましょう。
重吉　良い夢？
男　ええ、今は良い夢の時間ですから、良い夢の時間の皆さんがこうして月を支配しておられる訳です。で、王子が眠ると、悪い夢がのさばるんですな。悪い夢は悪いですから、時々、王子が起きても良い夢の振りをして消えずにいたりするんで、非常に厄介なんです。
重吉　どうやって見分けるんだよ。
男　だから巨人ですよ。
重吉　え？

男　奴らはみんな身長が一八〇センチ以上といった特徴を持ってるんです。しかしねえ、奴ら悪いから、変装が得意なんです。背を曲げたり、ヒザで歩いたり、案外大変です。見分けるのは・・

重吉　あんたは？

男　言ったでしょう？ハーフなんですよ。一七九センチ、ギリギリです。どっちに行っても差別されちゃって、こうして奴隷として働くしか術がなくて・・

重吉　奴隷？隊長かと思ったよ。

男　そこですよ。背がでかいと、どうしても偉そうに見えるでしょ？それも又、良い夢の神経をさかなでるんですな。

小人１　砂嵐だ！お前がぐずぐずしてるからだ。

小人２　急げ！

と、方々に散って行く。

男　じゃあ、又！

重吉　これは・・・

男　ここは、月の、夢の狭間なんだよ。ここが唯一、悪い夢と良い夢の合流地点。王子のまどろみの時間に現れる場所さ。砂嵐は、眠りと目覚めの合図なのさ。後で又、半分の私に会えるだろうよ。

と、男も消える。

小人達の中にいた一人が消えずに残っていた。

重吉　あれ？一人残ってる。大丈夫なのか？

残った小人、立ち上がると、一八〇センチ以上の大男であった。

重吉　あ！悪い夢。

と、身構える。

大男　おいおい。

重吉　こんなところでやられたくないからな。

大男　ここには、善悪なんて存在しないんだから。ただの名前さ、良いも、悪いも。

重吉　は？

大男　重吉・・・

重吉　・・・え・・・

大男、良く見ると動太郎である。

重吉　・・・父さん・・・なんですか？

動太郎　お前がだいぶ苦しんでいるようだから手を貸してやりたくてね。

重吉　父さんは死んだはずなのに・・・

動太郎　「青い鳥」の思い出の国の住人さながら、登場したんだよ。

重吉　ミチルもいないたった一人の旅に、僕はズイブン疲れてしまいました。

動太郎　みんなそうなのさ。だから忘れるんだ何もかも。生きて行かなくちゃならないからね。

重吉　父さんは死んじゃったじゃないか。何も僕に伝えないまま、何も教えてくれない

ままに・・・

動太郎　・・・うん・・・とうとうやられたんだ。過去にね、刺されたのさ。

重吉　仕事中、ダンプにひかれたんだろ？

動太郎　母さんがそう言ったのかい？

重吉　つなぎ合わせる部分もないほどバラバラに壊れた死体だったから、そのまま灰にしたんだよって母さん泣いてた。

動太郎　嘘さ。俺は軽子に刺されたんだもの。

重吉　本当に？

動太郎　ああ、五年前、軽子は、偽名を使って引っ越しを依頼したのさ。いや、そのアパートの部屋には昔の軽子そのままの若い女がいた。赤ん坊を抱いたその姿は、あの日、結婚披露宴に現れたあの軽子にまるで生き写しだった。

驚いて後ずさると、

「もう梱包は済ませました。もうすぐ母が戻りますから、お茶でも飲んでお待ちください」

と、お茶を出し、静かにそこに座っていた。重子だ！私にはすぐに判ったよ。

重子の座る背中越しの窓から見える月は満月だった。その途端、押さえ切れない

欲情が突き上げ、なんと私は娘の重子を押し倒していた。これじゃケダモノだ、と止める心より、月の魔力が勝っていた。
重吉、俺達親子は月に気を付けなくちゃいけないよ。軽子はいつも満月をバックにやって来る。あいつの吸引力は月の吸引力だ。最初に軽子と出会ったのも満月の夜だったんだ。
・・・突然赤ん坊が泣いた。あらがっていた重子がフッとおとなしくなった、その時、背中に冷たい衝撃を覚え振り返ると、青白い顔の中年の女が立っていた。女の右手のナイフからおびただしい血が流れ、俺は刺されたんだとその時に判った。ああ、俺は死ぬなと思った時、
「お母ちゃん」
という声がした。霞んで行く目を凝らすと、中学生ぐらいの男の子が女の左手をつかんで揺すっていた。
「見るんじゃないよ、重太郎、見るんじゃない」
女の声は軽子だった。随分やつれて、顔の変わったその女は軽子だったんだ。
「軽子！」
俺が最後に言ったのは、振り切っても振り切っても追いかけて来る過去そのもの

の名前だったんだ。

重吉　・・・・・・

動太郎　・・・・・・

重吉　死人がもし口をきいたら、お蔵入りの殺人事件は全て解決出来ただろうね。

動太郎　ああ・・・。俺もやっと、スッキリしたよ。

重吉　母さんはどうして僕に隠していたんだろう。

動太郎　女だからな、母さんも・・・。

重吉　・・・・・・

動太郎　どうした？

重吉　僕は、父さんの話の、重太郎という子供の名前が気に掛かるんです。

動太郎　俺の子じゃないぞ。俺はあの時、軽子と二十三年振りに会ったんだから。

重吉　・・・思い出したんです。

動太郎　何を？

重吉　僕はどうして忘れていたんだろう。一七歳のあの日のことを僕は殺して生きて来たんだ。あの日の記憶を。生きるために消したんだ。

動太郎　何のことを言ってるんだ？

重吉　父さんが、引っ越し屋をやろうと決めた日のことですよ。あの日の僕は、今度の自分の家が判らずにいて、父さんが明け方近くに迎えに来てくれるまで、ボロアパートの電柱の前にポツンと一人で立っていましたよね？

動太郎　ああ・・・そんなことがあったっけ・・・

重吉　僕は、ずっとあそこに立っていたんじゃない。あの時ちょうど、帰って来て、そして父さんと会ったんです。僕は今日まで。それを忘れていたんです。

動太郎　・・・・・・

重吉　あの日僕は、軽子に会ったんです。

動太郎　ええ？

重吉　満月の夜はたまらないから、一晩一緒にいてくれとしつこくせがまれて、日暮里の軽子のアパートで一晩一緒に過ごしました。

動太郎　なんだって？

重吉　電気を消した闇の向こうに、五円玉ぐらいの月が光り、それが徐々に大きく迫って来たように感じた時、軽子の体が僕の真上にありました。僕はあの時、狂っていたんでしょうか？軽子と重なりたいと思いました。重なって、ひとつになりたいと何かが激しく突き上げるのです。僕が軽子を抱いて今度は上になった時、押

し入れの戸がスーッと開きました。その闇の中に、光るものが二つ。
それは子供の目でした。満月を映した目が二つ。重子です。
押し入れの中の二つの月に見つめられながら、僕は軽子を抱いていました。

動太郎　まさかお前は・・・

重吉　父さんは月の魔力に気を付けろと言いましたよね。僕も又、月に見入られてしまったのかも知れません。

動太郎　その時子供が出来ていれば・・・

「重太郎」、軽子がつけそうな名前だな・・・

ら、厄介だ・・・。どうして俺達の行く道はこうも厄介なんだろう！

重吉　父さん、父さんには僕がどう見えます？

動太郎　え？

重吉　僕は軽子に、そして重子に似ていますか？父さんには僕が僕に見えていますか？

動太郎　勿論だとも。何を言い出すんだ。

重吉　僕が今日、重子と重なったのは、忘れていた過去が僕に復讐するためだったんだろうか・・・

と、遠くの方にサングラスをかけた軽子らしき人物が立っている。

動太郎　あ！軽子、お前は死後の世界にまで追いかけて来るのか・・・

と、後ろを向いて消えかかる。

重吉　待ってくれ！父さん、僕は軽子を追いかけます。本当のことを知りたいから。僕はもう、逃げたくないんだ。

と、後を追って去る。

動太郎　重吉！

と、追いかけようとした時、

方々から濃紺のドレスを着た女達が自転車に乗って現れる。

動太郎　ああ・・・悪い夢だ・・・・

そして動太郎を取り囲み、想像を絶する方法で殺してしまう。

男　これで完全に絶滅したな。

一同　うん。

と、自転車から降りると先程の小人達であった。

小人１　腹減ったなあ・・・・

小人２　ラーメンでも食おうか。

一同　うん。

雨音が聞こえる。

別の空間に現代のアパートの一室が浮かび上がる。三年前の夜の空間である。

マッサージの白衣を着た重子が、腹違いの弟重太郎に肩を揉んでもらってい

る。

重子　ねぇ重太郎、どうしてあたし達、いつもこんなに暗いのかしら。こんな、ビルの谷間の日も差さない２ＤＫで、いつも生乾きの洗濯物取り込んでるから、心の方まで湿ってくるんだろうか。

重太郎　・・・・・・

重子　今はね、軽くて明るい時代なんだ。奥まで探らず、宙に浮いたまま、ヒョイヒョイ生きてカラリと死ぬのが流行ってるのに。

重太郎　・・・・・・

重子　重太郎。

重太郎　名前が悪いんだよ。重子と重太郎じゃ、軽くなり様がないんだ僕ら。

重子　母さんは軽かった。

重太郎　軽すぎた母さんの軽いあやまちが、僕らを重くしたんだな。

重子　あたし達がただのあやまちで生まれたなんて、あんまり惨めじゃないか。いくら私生児だって、愛の結晶には違いないもの。

重太郎　ハハハ、愛だなんて、甘いよ姉さんは、愛なんて「絶望」の緩和剤さ。みんな死

ぬのが怖いから、見えないものに縛られたいんだ。

重子　ほんとに暗い子だね、あんたは・・・

重太郎　ストレートなだけだよ、軽く明るい人にこそねじれた暗さが僕には見える。もろい人ほど明るいんだ。

重子　もろくてもいいよ、明るく過ごせれば。

重太郎　姉さんはそう言いながら、いつも暗い道を選ぶじゃないか。暗い方へ暗い方へ自分を縛ってく。ほんとは好きなのさ、暗い絶望が。

重子　どうしてなんだろう。普通に普通に暮したいのに、いつも道が曲がって行くのよ。悪い方に悪い方に曲がって行く。そしてその道が、落ちて行く道が私には前から判っているの。予感がするのよいつも、そしてその通りになる。

幾つもに分かれた道の前で、私はいつも、悪い予感に震えている。行っちゃいけない道に片足だけ乗せた時、先の予感の胸騒ぎで立っていられなくなるんだけど、いけない、いけないと思いながら、いけない方向に歩いてく自分がいるのよいつも。悪い胸騒ぎの方角にいつも足が向いているの。きっと母さんのおなかの中にいたときだって、生まれたくなかったに違いないの。判かっていたのよもう、こうなる事が、生れちゃいけないって思いながら、この世という暗い道に立ってい

たのかもしれない。

クラスの給食費が盗まれた時も、心臓病の悦っちゃんが体育の授業で倒れた時も、私は予感通りに振る舞って、みんな自分のせいにしてきたけれど、なんだかそうしなければいつも落ち着かないの。火野と出会った時もそうだった。陰気で嫌な男だと思って瞬間に、私は火野と一緒になるんだと予感がした。いつもいつも嫌いな奴を愛さなければならない気になる。だからいつでも暗いのよ。嘘ばかりついて生きているから。

重太郎　軽くても重くても、結局同じだな、母さんも姉さんも、遊んでいるんだよ、自分自身を。母さんにとっては、死ぬ事さえ遊びだったんだ。

重子　遊ばれたんでしょう？母さんは、ダッチワイフみたいに使われたのよ。

重太郎　使われたかったんだ母さんは、人形みたいにすべてを軽くして、体温さえ消して、自分の心を探したかったんだ。心がどんなものかを知る為には、死んでみるしかないんだもの。なくなる瞬間の刹那の夢に、本当の心を知ったはずさ。

重子　暗いよお前は、お前と話してるといつも暗くなってくる。お前を見てると、自分を見てるみたいで本当に嫌んなる。

重太郎　帰りなよ、火野さんのとこに。

重子　いやよ、もう、どこにも帰りたくない。引っ越したいのよ、全部をね、全部を引っ越したい。どこでもいいから、明るい場所へ。日差しの強い夏の海岸とかで、カラカラに乾いた砂の上に寝そべって暮したら生まれ変わる事だって出来る気がする。日本海じゃないよ、太平洋、裏より表で生きてみたい。

重太郎　引っ越し癖がついてるんだよ。僕ら、母さんについてあちこち引っ越してたからね。どこに引っ越したっていつも同じだったじゃないか。

重子　引っ越した先はいつも暗い路地裏だったもの。まるで罪人（つみびと）みたいに、物陰に隠れる様にして暮してきたっけ。あたしがしたいのはそんな引っ越しじゃない。ホラ、例えばあの向かいのマンション、あんな最上階に住んでみたら、きっとこの街が違う生き物に見えるでしょうね。月も星も近く、東京タワーの上を飛ぶ飛行機の明りだって見える。私達のこんな暮しだって忘れて暮せるんだ。

重太郎　場所を変えたって同じさ。どんな明るい場所でも、暗いのは姉さんなんだから。姉さんが場所を暗くするのさ。

重子　重太郎、ほんとに嫌な子だねぇ、お前は。

重太郎　姉さんの弟ですからね。

と、出前持ちが現われる。雨の日の出前用の雨合羽を着込んでいる。

出前持ち　お待ちどう‼

重子　あ、ご苦労様。

出前持ち　これ、サービスのお新香ね。

重子　いつもすみません。おいくら？

出前持ち　んんん、今日はいいや、全部サービスしちゃう。

重太郎　そんな、ダメですよ、奥さんに叱られるでしょ？

出前持ち　僕、社長だから、いいのよ。

重太郎　同情しないで下さい。

出前持ち　同情じゃないのよ、愛情よ、ねぇ、重子ちゃん。

重太郎　曲がっちゃだめだよ姉さん。

出前持ち　え？

重子　曲がらないよ。明日仙台行くから。

出前持ち　あら、引っ越しちゃうの？

重子　うん。海の見えるとこで、砂の上に乗っかって暮します。

出前持ち　残念だなぁ・・・

重太郎　僕はここにいますから。

出前持ち　関係ないよ。

重子　揉みましょう。

出前持ち　え？

重子　サービスのお礼に。貸し借りチャラにして出掛けたいから。

出前持ち　いいの？いいの？

と、言いながら横になる。重子マッサージを始める。その横でラーメンをする重太郎。

何でも相談に乗るからね、重子ちゃん。親戚だと思ってさぁ、我がまま言っていいんだよ。

重太郎　おじさん、こんな姉さんのどこが好きなの。

出前持ち　暗いとこ。今時いないよ、しっかりと暗い人。昔のフランス映画なんて、暗い女優であふれたのにねぇ。ダメなのよ俺、チャラチャラ軽い今時の大学生とかＯＬ

とか。女房なんか、重いの体重だけだもの。イテッ！

重子　ごめんなさい、なんか気が合わなくて。

出前持ち　合わない？僕ら。

重子　おじさん、陽気だから。

出前持ち　ダメだよ合わせなきゃぁ、重子ちゃんが固くなってんだ。もっと胸を開いて、心を預けなくちゃ。リラックス、リラックス、身も心も私に預けなさい。

と、いつの間にか雨の上がった空に月が出ていた。

重太郎　あ、満月。

出前持ち　ええ？

と、出前持ちと重太郎、後ろの月に見入る。

重子の様子が変貌していく。

出前持ちと重太郎、それに気が付きギョッとなる。

重太郎　姉さん・・・

重子　誰だ！

出前持ち　え？

重子　ここはどこだ、どうして僕は・・・

出前持ち　何だなんだ、大丈夫かい？重子ちゃん。

重太郎　姉さん引っ越したんです。

出前持ち　ええ？

重太郎　満月になると、姉さんは引っ越すんです。そして別の奴が代わりにやって来る。月が消えれば平気です。また姉さんは帰ってきますから。

重子　何言ってるんだ。仕事に行かなきゃ、どうして僕はこんな所にいるんだろう。

出前持ち　重子ちゃん・・・

重子　重子？僕は、僕は風間重吉だ。

出前持ち　重吉？そんな男知らんよ。

重太郎　僕の父親です。そして姉さんの兄でもある人。もろくて明るいはずの、今だ知らざる僕らの兄弟。

重子　何言ってるんだ。君は誰なんだ。

重太郎　重太郎ですよ。今は、あなたの息子です。月が消えれば弟です。

出前持ち　厄介だ、重子ちゃんは厄介ね、でも、いいなぁ、暗くて重くて厄介なとこがますいいなぁ。

と、側に寄る。

重子　な、なんだよ・・・

出前持ち　治したいなぁ、重子ちゃんの病気。

重子　やめてくれよ！

と、舞台の中央に一人立ち尽くす。

辺りは元の月の上。

月の上の満月軒のショーが始まる。

客席には先程の小人達が座っている。

ステージの上には月ではなく、ニセの地球がある。歌手が歌っているが、周

りで踊っているダンサーは風間一家である。

歌手

♪幸せ探して来たけれど
空に地球が笑うだけ
あなた私を好きかしら
死んでもいいとおっしゃって
青い星　白い星　赤い星
五色に変わる星の色
私の心もあの地球
何見て変わる星の色
私あなたを好きだから
死んでもいいとおっしゃって

店主がマイクを持って現われる。
蕗谷である。

蕗谷　いらっしゃいませ、いらっしゃいませ。満月軒、千周年記念の特別パーティーにお越し頂きまして誠にありがとうございます。本日お越し頂きました皆様には、日頃の感謝をこめまして、全品半額にて料理いたします。

小人達口々に色んなものを注文する。

注文を聞いて回る店員（子供）。

風間一家は踊っている。

と、重吉が現れる、しかし重子の装いである。

蕗谷　おや、君、やっと現われたな、待っていたんだよ。困るんだよね、カウンセリングの途中で抜けられちゃあ・・・

重吉　あなたは・・・

蕗谷　君が意地でも信じると言った医者じゃないか！どうだい？私に全てをあずける気になったかい？私を好きになってくれただろうね？

重吉　僕は・・・

店員　ここに座って。

と、イスを持ってきて座ろうとする。

重吉　君は・・・

店員　ショーアトラクションが始まるよ。

ステージの上で寸劇が始まる。役者は踊っていた風間一家である。

長子　もう六時なのに、遅いねえ、重吉は・・・

重吉　あ、母さん！

店員　シッ！

三郎　母さん、もうトラック出すよ。

幸次　トラックってお前、月までトラックで来た訳？

小人達笑う。

行男　いくら、どこでも神速にって言ったって、なんでこんな引っ越し引き受けたの！

小人達笑う。

長子　仕方ないだろ？月でもアフリカでも北千住でも頼まれりゃどこでも行くんだよ、風間運輸は。

小人達笑う。

重吉の扮装の重太郎現れる。

三郎　あ、おかえり、どうだった？

長子　いいから早く帰ろ。この時間は渋滞で時間掛かるんだから。

幸次　渋滞はないだろ、月なんだから。

小人達笑う。

長子　なんでもいいから帰るんだよ！

佐和子　ハハハお母様、この人重吉さんじゃないわ。ハハハ。

長子　ホントだ、ハハハ。

伸子　誰よこの人、ハハハ。

勝　重子の弟の重太郎くんだよ、ハハハ。

勇　父さんの愛人の？ハハハ。

長子　違いますよ、重吉の隠し子ですよ、ハハハ。

佐和子　うちの人に隠し子なんていたの？ハハハ。

長子　いたんだよ、ハハハ。

三郎　どうりでソックリだ兄さんに、ハハハ。

幸次　「おいおい（甥）」なんてね。

一同　・・・・・。

幸次　シャレだよ。

一同　ハハハハハ。

笑いながら火野と真弓登場する。

勇　おや火野さん明るいですなあ。

火野　当然です。重子も帰って真弓もホラ。

真弓　幸せの青い鳥はどこにいるの？

一同　ハハハハハハ。

勝　直ったんですなあ。

火野　月まで来た甲斐がありました！

渉　青い鳥は僕らの隣にいるんだよ。

一同　ハハハハハ。

長子　ホントにうちは幸せ家族。

一同　ハハハハハ。

重太郎　父さん、あなたは重子の人生を生きられますか！

一同重吉を見る。

長子　あんた軽子かい？返して！うちの人返して！

重吉　・・・・・。

伸子　母さん、落ち着きなさいよ、死んだものは返せないわよ、いくらなんでも。それに、軽子さん、父さんと心中したんでしょ。

幸次
三郎
行男　ええええ！

伸子　死んだ人に、死んだ人返せって言ったって仕方ないでしょ！

長子泣く。

火野　何言ってるんですか、重子ですよ、僕ら一緒に来たんです。重子！あいさつなさい、こちらは佐和子さんの御主人の重吉さんだ。

佐和子　違うんですよ、こちらはね、

重吉　重吉は僕だ・・・

長子　先生、重吉は、六時までにもどれますか？

蕗谷　もう少し、もう少し時間かかります。

重吉　僕は・・・

音楽が聞こえ、ステージの人物が歌い始める。

歌手　♪悪い夢を見た　昔　子供の頃

長子　起きあがると側に誰もいない

廊下を走って探したけれど

二人　父さんも母さんもどこにもいない

悪い夢　怖い夢　長く続く廊下

果てのない闇

呼んでも叫んでも誰もいない

ただ暗い廊下

一同　悪い夢を見た　昔　子供の頃

ホコリのような白い星が

夜の空に瞬くばかり
誰もいない家　誰もいない街
悪い夢　恐い夢　私はどこに
闇の中に月
赤い月　星の中
私を見ていた

重吉呆然と立ちつくしている。
辺りは暗くなり重吉と店員の二人だけになる。

店員　悪い夢を見たんだね？
重吉　え？
店員　僕が眠っているから、君もまだ目覚められないんだ。
重吉　光君だね？
店員　ここではね、もう名前なんかいらないのさ。
重吉　思い出したんだよやっと、君の事を・・・

店員　僕はね、僕はずっと君の事を夢に見ていた。この気の遠くなるような宇宙の闇の中で、ずうっとね。でももう、僕は一人ではないから、いろんな死んだ人間の夢と同化して、自分一人では決して見られなかった事を知ることができるようになったぜ。見知らぬ主婦のため息も。猫の夢さえも。

重吉　僕をここまで連れて来たのは光君なんだろう？

店員　君がそれを望んだからさ。僕はもう細かいチリのようなものなんだから。

重吉　光君、僕は誰なんだろう。僕が僕であることの理由は何なのかなあ。

店員　誰だって一人では決められないさ。僕は死んで、それを知ろうとしたけど、死んだって判らないのさ。大勢なんだ。人ひとりをこしらえているのは、とてつもないくらい大勢の者達の力なんだもの。僕は死んで、何だこういうことだったのかって自分の事が判った気がしたけれど、それだって口に出しては言えない程の事なんだ。簡単なんだ。とても簡単なことなんだけど、言葉にはならない事なんだ。

重吉　知りたいなあ・・・

店員　知っているはずなんだよ、君は・・・誰でもそうさ。縛られてるからなんだな。もっと簡単に、生命のひとつとして生きればいいのさ。

重吉　君と、時々会っていたいな。なんだかとっても落ち着くんだ。

店員　僕の意識の細かくなった粒子はね、もう、君の一部にもなっているんだよ。会う必要なんてもうないんだ。君の頭に、僕の一部が住みついているんだもの。

重吉　ええ？

店員　考えなくてもいいんだよもう。僕は君と重なっているんだから。

重吉　・・・・

店員　ああ、僕はもう目覚めるよ。起きても眠っても、もう夢の中だけど・・・・

僕はもう、君の知らない国に行くよ。

砂嵐が舞う。

自転車に乗った小人達が行き交う。

店員、小人達の中に消える。

男が近寄って来る。

男　王子が目覚めました。あなたはいいね、人間だから。ちゃんとあなたでいられる。私ら今度はどんな私でいられるか、自分じゃ決められないんだもの。

重吉　誰なんです？

男　誰とは言えんよ。ホコリのようなものかな。宇宙に漂う意識のホコリ。神聖だったり、不吉だったり、その時その時によって、在り方が変わるのさ。私らはただの「感じ」なんだもの。じゃあ、又どこかで。

と、消えていく。

重吉　これは夢なんだろうか。だったら、僕は一体いつ目覚めるんだ。

と、突然月球儀が後方に引っ張られる。重吉、驚いて振り返ると、後方に巨大な月が出ていた。

その上にサングラスをかけた女が立っている。

あっ！軽子・・・

女、手を振っている。

いや、重子・・・重子だね。
お前も軽子と同じように、いつも満月に引っ張れるんだ。忘れていたよ、お前という妹のことを。
お前はまるで、昼間の月のように僕の中に隠れ潜んで、僕がいつか思い出すのを待っていたんだね。
僕が思い出した途端に、お前は僕と重なった。互いが月の引力を得たように、僕はお前に、お前は僕に引っ張れたんだ。
でも重子、僕の暮らしを夢見るんじゃない。
僕はただの、疲れ切ったおじさんだ。
そしていつも、不吉な負の方向へ引っ張られる、お前と同じ重い男だ。一生懸命に生きて来たさ。自分のことなんか、これっぽっちも考えて来なかった。
ただただ毎日、生活するのに必死だった。人に頼られればそれに答えて、ひとの夢に手を貸してやりもしたさ。でも自分の夢なんか見るヒマはなかったんだ。
夜の夢だって見たことがない。
寝て起きて、起きて寝て、腹筋運動みたいに暮らしてただけさ。
自分の思い通りになったことだってひとつもない。なにもかもあきらめて、朝か

ら晩まで働いて、それが当たり前なんだと思っていた。
でも・・・疲れたんだ・・・疲れたんだよ重子。ただ「死」に向かって生きて行くことに・・・
僕は誰なんだ。何のための僕なんだ・・・
僕のための何かがあってもいいんじゃないだろうか・・・
重子、お前は僕を思ってくれたんだろ？
僕の本当を夢見てくれたのはお前だけだ。
僕はこれから僕を作っていくよ。本当の僕をね。だから、さようなら重子。
僕がそこに行くから。お前が夢見た夢の中に、本当の僕の世界に、引っ越しするんだ。
ありがとう重子、さようなら、重子。

月の上の重子、月の彼方に消えて行く。
辺り再び暗くなり、重吉一人残る。
蕗谷が現れ、椅子に座る。看護婦の扮装の妻も現れる。

蕗谷　風間さん、これでやっと一人に統合されました。
重吉　え？
蕗谷　あなたはもう、正真正銘のただ一人、風間重吉さんだ。
重吉　あなたは・・・
蕗谷　やだな、蕗谷ですよ。
重吉　ここは・・・
蕗谷　蕗谷医院です。
重吉　重子は・・・
蕗谷　消えましたよ。もう大丈夫。もう二度と現れませんから。もうあなたの中で別の声がしたりすることはありません。
妻　良かったわね。もう記憶が途切れる事もないし、普通の暮らしができますね。
蕗谷　そうだよ。おめでとう。
重吉　・・・僕は・・・
妻　あなた、もう薬はいりませんよね。
蕗谷　ああ、もうここに通うのも終わりです。月に一度、報告にさえ来ていただければ。頑張りましたね、風間さん。もう仕事に戻って平気ですよ。

妻　お疲れ様。次の方どうぞ。あなた、これ、次の患者の。

と、カルテを渡す。

蕗谷　ああ、ウツ病の・・・これも厄介だな。じゃあ、風間さんお元気で。

と、二人診察室の方へ去って行く。

重吉　僕は・・・

辺りは一景のマンションに変わっている。引っ越しの終わった部屋の真中にテーブルと椅子だけが置いてあり、そこに高子が突っぷしている。テープレコーダーからロシア語がもれている。

重吉　終わったのか・・・みんなどこに行ったんだろう・・・お客さん、お客さん、テーブル運びますよ。

と、高子を揺すると、高子ガクリとくずれ落ちる。

重吉　お客さん。

と、高子を起こすと、引っくり返った高子の胸にナイフが突き刺さっている。

重吉　・・・・

と、重吉声をあげようとした途端長子が入って来る。

長子　キャー！

その声で方々から家族が現われる　勝、勇、伸子、幸次、三郎、行男である。

長子　お前なんて事、なんて事を、

幸次　兄さん、そんなに悪かったんだね。

伸子　大丈夫、大丈夫、病気だったら罪にならないから。ね、勇さん。

勇　うん、病気としか言いようがないものね。なんの恨みもない人なんだから。

三郎　そうそう、今日初めて会う人なんだし。

勝　でも何も殺さなくたって。

幸次　だから、病気なんだよ。悪かったんだよ兄さんは。

行男　あ、頭だものねえ。

伸子　そうそう。

長子　お前は、もう、ホントにもう。指紋拭いとこうか？

伸子　ええ？かくしちゃうの？ね、逃げちゃうの？火曜サスペンスみたいなことしちゃうの？

勇　落ち着きなさい。・・・父さん・・・

勝　自首するよね、重吉君。

重吉　違いますよ！もう！今、来たとこなんですから、僕は。

長子　え？

重吉　寝てるんだと思って声をかけたんだよ、そしたら・・・

長子　ホントかい？

重吉　そこに母さんが入ってきたんじゃないか。ホラ、軍手も服も血なんかついてないじゃないか。

一同　・・・・

勝、引っ越し用に壁に張ってあったマンションの見取図をさす。

勝　私は、この三番で、最終点検をしておった。

長子　私はお手洗いの棚を見てました。

三郎　俺は四番で拭き掃除。

伸子　何、みんな、アリバイっていうの？それ言ってるの？やだ勇さん、勇さん、これ推理劇だったの？やだあ・・・

勇　僕達はベランダで、その・・・

伸子　植木鉢の梱包よ。

勇　そうそう。

行男　僕は二番で・・・とにかく二番にいた。

幸次　二番にいたのは俺だよ。
行男　幸次兄ちゃんは風呂場だろ。
幸次　バカ、風呂の掃除が終わって二番のクローゼットを見てたの。
長子　行男・・・お前、
行男　違うよ・・・下で電話してたんだよ・・・夜、ちょっと待合せがあったもんで・・・
長子　バカ！
伸子　警察に電話しましょう。あたし達が犯人のはずないんだから。理由がないんだもの、こんなことするような。お客様殺しちゃったらお金もらえないんだもの。
長子　だけど、私たちしかいなかったんだから疑われないかしら。
伸子　やってないなら平気よ。ちゃんと調べればね。やってないんでしょ？ね？
一同　・・・・

と、互いをさぐり合う。

と男が駆けて来る。刑事風の男である。

伸子　あ、良かった、刑事さんですね？

男　・・・違います。

伸子　え？じゃ、じゃあ・・・

男、懐に手を入れる。

一同隅にかたまる。

男、懐から名刺を出す。

男　桐山です。月光社という出版社の者です。

長子　・・・はあ・・・

桐山　一時間ほど前、原稿を取りに伺ったら、先生がこんな状態だったんで、方々連絡してから引き返してきたんです。

長子　一時間ほど前？

勝　私達いましたけど・・・

桐山　お忙しそうでしたので声をかけずに失礼しました。

伸子　あたし仕事に疲れて寝てるんだとばっかり・・・

と、ラーメン屋の出前持ちが来る。
重吉、ドキリとなる。

長子　頼んでませんけど。

ラーメン屋、黒い手帳を見せる。

桐山　あ、ご苦労様です。

刑事Ａ　張り込み中だったもんでこんな格好で失礼します。

と、次々に色んな扮装をした刑事たちが三人程入って来る。

桐山　ご苦労様です。

刑事Ａ　うーむ・・・この手口は・・・。又やられましたな。このマンションの回りには私服が五人も見張ってたんですがね、残念だなあ・・・

刑事Ｂ　全くお手あげです。

他の刑事　お手あげです。

幸次　あのう・・・

刑事Ａ　連続殺人です。昨日警視庁に予告の電話が入りまして、一日中厳重に監視していたのにこれです。

と、窓のそとにゴンドラが現われ、窓を拭く男が現われる。

桐山　遅いなあ・・・

刑事Ａ　誰がです？

桐山　明智さんですよ。

刑事Ａ　え？

桐山　こういう時は呼ぶもんでしょう。

伸子　誰？あたし知らない、誰？明智さんて。

勇　黙って話を合わせなさい。

勝　ほほう。

一同　明智小五郎さんですね？

と、窓ふきの男飛び出して来る。

一同　あっ！

窓ふきの男扮装を取る。と、かの有名な明智小五郎である。

一同　明智さん！

明智　私は一日中このマンションの窓から中を伺っていたんです。

桐山　それでは犯人のめぼしはついてるんですね？

明智　ええ。

勝　じゃあ、何で殺されてから現われるんですか！殺される前に出て下さいよ。あんたいつだってそうだ！私は子供の頃からそれが一番くやしかったんだから。

明智　それじゃあ推理小説にはならんのですよ。

勇　これは小説なんですか？

伸子　いいから推理を聞きましょうよ。推理するんですよね。一人で喋るのよこれから

この人。「なるほど・・・」みたいなこと喋っちゃうのよね。

桐山　明智さん。

明智　小林君、君は犯人を尾行してくれたんだよね。

小林と言われた刑事の一人、扮装を解くと、小林少年になっている。

一同　おお！

小林　はい先生。奴は変装が得意だから何度もまかれてしまって、厄介な尾行でしたが、なんとか突き止めました。

長子　ということは、この犯人は・・・

一同　怪人二十面相なんですか？

明智　いちがいには言えませんが、小林君はどう思う？

小林　ある時は家政婦また、ある時は中華料理店の店員と目まぐるしく変化するその早業は、奴の手口と一緒です。ですが、この被害者との関連が今ひとつ判らんのです。

明智　桐山さん、この殺された土田高子とは昔からのお付き合いですか？

桐山　はあ・・・もう十年ほど前から翻訳を依頼しておりますが・・・・

明智　翻訳の仕事は金になるもんですか？

桐山　同時通訳なんかですと、一、二時間で四、五万貰えるそうですがね。土田先生の場合、そうでもないですね。印税計算で売上の八％は支払いますがうちはそんなに売れてませんし。今回は通訳も兼ねて依頼しましたからだいぶ払いましたが、普段ですと収入は二、三カ月で五十万程度でしょう。

明智　それがどうしてこんなマンションに住んでられるんですかね。

一同　・・・・・・

小林　明智先生は、土田高子が、二十面相の一味ではないかと推理するんですね？盗んだ金でこんな生活をしていたのではないかと、それが、なにか仲間割れでも起きて、口封じに殺害されたとこういう推理じゃありませんか？

明智　さすが、小林君、私の助手だけあって、見事な推理だ。

小林　いやあ、先生の御指導のお陰です。

明智　じゃあ、帰ろうか。

小林　はい。

桐山　待って下さいよ。犯人はどこにいるんです？何も解決してないじゃありませんか。

勝　そうだよ。犯人を追い込んで、自殺させたりしてくれなきゃあ、明智さんとは言えないよ。でもいつも手の込んだこと考えすぎてその間にかえって何人も犠牲者を出したりするんだよなあ。

長子　パパッと、終らしちゃってよ、パパッと。こっちも忙しいんだから。暗くなってきちゃったじゃないの。帰ろ、帰ろ、私達は関係ないんだし。

伸子　そうね、怪人二十面相なんて、子供じゃないんだから、もう。

明智　待って下さい。皆さん、ここから一歩も離れちゃいけません。

小林　判りました。明智先生は、この中に犯人が隠れていると推理するんですね？

明智　さすが小林君だ。私の助手だけあって見事な推理だ。

小林　いやあ、せんせいの御指導のお陰です。

明智　じゃあ、帰ろうか。

小林　はい。

桐山　待って下さいよ。遊んでるヒマはありません。

幸次　この中にって、僕達の誰かが二十面相だっていうんですか？

明智　犯人は非常に変装が得意だからねえ、本物そっくりに化けられるのさ。

一同、お互いを探り合う。

行男　兄さんが怪しいな、さっきまでいなかったんだから。

重吉　バカ、いなきゃ殺せないんだよ。

と、窓から誰かがはい上がって来る。

明智　だ、誰だ！

と、ピストルを構える。

はい上がって来たのは小林少年である。

本物の小林　先生、やられました。見張っていたら窓から突き落とされました。危ういところで下のベランダに落ちて、失神してたんです。

明智　ということは・・・

と、一同さっきからいた小林少年を見る。

小林　違います。僕は本物です。こいつがきっとそうですよ。

本物の小林　僕が犯人ならとっくに逃げてますよ！

一同　んんん・・・

明智　痛い！（と突然胃を押える）

本物の小林　大丈夫ですか？（と、いつもの胃薬を出す）

明智　やっぱり貴様だな！

と、小林にピストルを向ける。

小林　ハハハハハハそうだよ明智君、私が、かの、怪人多重人格だ。

一同　怪人多重人格？

明智　そんな怪人は知らんなあ・・・

桐山　とにかく明智さん、こいつをつかまえましょう。

明智　それより殺してしまおう。
桐山　そうですね、ピストルもあるんだし。

明智撃つが弾が出ない。

明智　やや、これは。
小林　ハハハハハハ弾を抜かせていただいた。
明智　くそう・・・
小林　重吉君、この人を良くみろよ。

と、小林、高子を起こして重吉に見せる。

重吉　あ、大田先生・・・
小林　僕が君の恩師を殺すと思うかい？
重吉　光君・・・君は光君だね？
小林　僕は江戸川乱歩が好きなんだよ。

重吉　ああ、これは君の夢の中なんだね。僕はまだ、帰って来てはいなかったのか・・・

男、現る。

男　さ、みんな片付けよう。

と、周りにいた刑事達と家族、身長一八〇センチ以上の明智と桐山を縛り上げる。

刑事Ａ　殺しても殺しても、悪い夢は尽きないねえ。

Ｂ　いつになったら戦いが終わるんだ。

明智　重吉、助けてくれ、重吉。

重吉　・・・あ、父さん・・・

明智　俺はお前を助けに来たんだよ。正義の明智探偵になって。

重吉　父さん。

男　騙されるんじゃないよ君。こいつらはただの、悪い夢のなごりなんだから。

と、一同どこかに消えて行く。

小林　ハハハ僕は良い夢を見たなあ。

重吉　光君・・・

子供　満月だ・・・

空に満月がかかっていた。

僕は又眠るよ。

と、高子の胸からナイフを抜き取る。

重吉　光君・・・

子供、窓ワクに立ち、ナイフを自分の胸に突き刺す。

重吉　光君！

子供、飛び降りる。

光君！あああ・・・

立ち尽くしていた重吉倒れかかる。

高子、起き上がり、歌う。それはまるで子守歌のように重吉を眠りに誘う。

高子　♪月は悲しく歌う

人の世を嘆き　愛そうとして

ただ見つめ　そこにいる

いつも遠くから

けれど傍らにまで

その光りは注いでいる

この星とともに生まれ
いつか消える時まで
人の生命の誕生も　その果てる時も
歌いながら見下ろし
じっとそこにいる
月はどんな夢を見るのだろう
人の見る夢を月も見るのだろうか
戦いの地獄も嵐の街も
人の夢の中に消えるものなら
月の記憶はどうなるのだろう
月の記憶はどこに
それもまた人の夢の中か

漂う記憶はどこに
それもまた人の夢の中か
月は悲しく歌う

人の世を思い　愛そうとして

長子が現れ、高子の歌に和す。　高子はもう一度この歌を歌っている。

長子　♪アアアアア
忘れようとしてもこの胸を縛る
ひとり残された真夜中のこと
血のような涙を流し
枕を濡らした日々
忘れようとしても忘れられない
心凍る夜　アアアア

看護婦の衣装のままの歌手が現れ、又それに和す。

歌手　♪アアアアア
男達の夢にあやつられ

女はまるで小舟のように
身を千切られ抱かれ
沈んで行くのか
どうしようもない　血の行方に
あらがいようもなく
落ちて行くのか　アアアア

と、重子が現れ又それに和す。

重子

♪アアアアア
母の夢のなごりが
渦のように激しく
思い出せ　思い出せよと
捨てられ切られて歩いた道を
一人で歩いた暗く湿った道を
忘れようとしても忘れられない

心裂ける夜　アアアア
四人　漂う記憶はどこに
それもまた人の夢の中か
月は悲しく歌う
人の世を思い　愛そうとして
高子　月は悲しく歌う
人の世を思い　愛そうとして

長子と高子消え、重子（実は重吉）と看護婦が残る。

看護婦　風間さん、風間さん、
重吉　・・・・・・
看護婦　どうしたんですか？家に帰らないんですか？
重吉　あなたは・・・
看護婦　通りかかったらドアが開いていたから・・・
重吉　ここは・・・

看護婦　マンションですよ。仕事で来たんでしょう？もう誰もいませんよ。
重吉　眠っていたんですね。
看護婦　疲れたんでしょう。家に帰って二、三日休んだ方がいいわね。
重吉　僕には帰る家があるんでしょうか。
看護婦　何言ってるんです？先生呼んで来ましょうか？
重吉　いいえ、一人で帰れます。僕は僕に帰ったんですから。
看護婦　この部屋は明るいわね。お月様のせいで。
重吉　ええ。こんな光りの中だと、自分が誰なのか判らなくなってしまいますね。

満月こうこうと輝いている。
引っ越し屋が現れ、舞台を転換していく。
そこは満月軒。
テーブルの上に横になった店主の蕗谷、重吉、つまり重子にマッサージされていた。
側にいたはずの看護婦は歌手の扮装に変わっている。
店の掃除をしている老婆は光の顔をしている。老婆、店の隅の月球儀を拭い

ている。
他のテーブルでは休憩中の引っ越し屋の家族が食事をしている。
火野と桐山もいる。他の登場人物も、店の従業員に扮している。
店のテレビからロシア語が聞こえている。
重子、マッサージの手を止め、空を見ている。

店主　重子ちゃん、重子ちゃん、どうしたの？
重子　え？
店主　ちゃんともんでよ。
重子　ちょっと・・・・
店主　え？
重子　ちょっと出掛けてた。
店主　どこに？
重子　ちょっと月まで。

月の中に地球儀を回す少年の影が見える。